「まぼろし」の講堂を追って　―竣工、解体、そして伝説へ―

茨城県立竜ヶ崎第一高等学校２年　樽井（たるい）　京也（きょうや）
永井（ながい）　淳（じゅん）・中澤（なかざわ）　祐香（ゆうか）・山内（やまうち）　浩平（こうへい）・山口（やまぐち）　智也（ともや）

1　はじめに

平成28（2016）年３月、私たちは、自らが通う茨城県立竜ヶ崎第一高等学校（以下、竜ヶ崎一高と記す）の歴史、特に、かつて建っていた講堂について強い関心を持ち、調査を行うことにした。今から112年前の明治37（1904）年に建てられ、36年前の昭和55（1980）年に解体されたという講堂の竣工から解体までの歴史的な変遷、講堂が担っていた役割の変容過程や当時在籍していた生徒の講堂に対する意識の変遷を調査する。

また、同時期に同じ設計図で建てられたとされる講堂を持つ、茨城県立太田第一高等学校（以下、太田一高と記す）、茨城県立水海道第一高等学校（以下、水海道一高と記す）、茨城県立水戸第二高等学校（以下、水戸二高と記す）を調査し、各校に残る資料を収集する。そして、各校の講堂を比較し、類似点と相違点を導き出していきたい。特に、講堂が現存する太田一高では、竜ヶ崎一高に保存されている講堂の設計図と一致するのか、実際に計測してその結果を検討する。

2　講堂でつながる４校の歴史
－龍ケ崎中、水海道中、太田中、水戸高女の創立－

（1）龍ケ崎中学校の創立

竜ヶ崎一高は明治33（1900）年に土浦中学校の龍ケ崎分校として開校した。分校設置については県南の各地域から手が挙がったが、最終的に龍ケ崎に決定したのは、当時の龍ケ崎町長や有志による働きかけが大きいものであったためと考えられる。明治33（1900）年に入学した１期生は130名であり、開校後約５年間の入学者数は80～130名程度であった。

（2）水海道中学校の創立

水海道一高は明治33（1900）年に下妻中学校の水海道分校として開校した。当初は水海道に中学校を設置する計画はなかったため、設置地域の選定にあたっては県東地域との誘致合戦が起きたが、最終的に水海道に決定した。当初は近辺の寺院を仮校舎としていたが、明治35（1902）年に水海道中学校として独立したのち、翌年明治36（1903）年に新校舎に移転した。明治33（1900）年に入学した１期生は120名であり、開校後約５年間の入学者数は80～130名程度であった。

（3）太田中学校の創立

太田一高は明治33（1900）年に水戸中学校の太田分校として開校した。教育環境の整備を急ぐ県北地域にとっての悲願であった当校の１期生には、最終的な入学者数134名の２倍以上にあたる308名の応募があったという。当初は近辺の寺院を仮校舎としていたが、明治35（1902）年に太田中学校として独立したのち、翌年明治36（1903）年に新校舎に移

転した。明治33（1900）年に入学した１期生は134名であり、開校後約５年間の入学者数は130名程度であった。

（４）水戸高等女学校の創立

水戸二高は明治33（1900）年に茨城県高等女学校として開校した。明治33（1900）年に入学した１期生は164名であり、開校後約５年間の入学者数は60～130名程度であった。

３　講堂の設計者とされる駒杵勤治技師について

（１）茨城県での足跡

４つの講堂を設計したのは、当時茨城県に採用されていた駒杵勤治である。技師として茨城県内の公共施設の設計にあたっていた。

茨城県での２年半という短い在任期間に彼は中学校６校、水戸商業学校、県立図書館、麻生警察署と、計９つの建築物を25歳にして設計・施工している。彼の県内での最も著名な建築物の一つに旧制土浦中学校の旧本館がある。

（２）講堂の特徴と動向

①特徴

彼自ら設計した４つの講堂の内外部の装飾の一部には、アカンサスをイメージしたデザインが施されている。アカンサスは地中海産のアカンサス・スピノザ種の葉が彫刻されたものであり、コリント式やコンポジット式において用いられてきた。水戸商業学校（現茨城県立水戸商業高校）の旧本館玄関は、丸みを帯びたロココ調の屋根からベルサイユ宮殿を模しており、彼は基本的には西洋建築を志向して県内９つの建築物を設計したものと考えられる。

②講堂の竣工

次に、駒杵によって設計された各校講堂の初期の動向について述べていく。比較的近い時期に開設された４校だが、各校の講堂もほぼ同時に竣工している。龍ケ崎中学校では明治37（1904）年12月７日、太田中学校では明治37（1904）年12月４日、水海道中学校では明治37（1904）年12月４日、高等女学校では明治37（1904）年に、それぞれ校舎群建設の中で講堂が竣工している。

③講堂の用途

講堂の用途だが、公的な行事が大半を占めていたようである。各校の百周年記念誌の記述にあるように、入学式・卒業式に加え、10年ごとの創立記念式典も講堂において執り行われた。

その他の行事として、龍ケ崎中学校では、明治43（1910）年に御真影奉戴式、大正４（1915）年に大正天皇の御即位・御大礼に伴う祝賀式、昭和14（1939）年に戦没同窓会員の慰霊祭が行われた。

水海道中学校では、明治44（1911）年に開校10周年記念式典及び当校図書館の開館式が行われた。太田中学校では、学校行事のみならず太田町（現常陸太田市）が催す講演会な

ども含めて数多くの用途が見られる。弁論部により年２回弁論大会が行われたほか、昭和3（1928）年に栗田勤による義公生誕300年記念講演、昭和15（1940）年に太平洋戦争開戦に伴う宣戦詔書の読み上げ、昭和20（1945）年に終戦の詔書の読み上げが行われた。なお明治37（1904）年12月４日、当校の創立記念日と定められる日に行われた太田中学校講堂落成式には、駒杵自ら出席し、工事の経過を報告している。

水戸高女では、年１回講話部大会と音楽会が盛大に行われていた。また大正期には、毎月１回講堂訓話として校長あるいは著名人が修養上に関することや時局に関する訓話を全校生徒に対して行った。

龍ケ崎中学校や水海道中学校講堂の内部正面にあるアーチ左右のスペースには、掛軸が掲げられていたのに対し、水戸高女では、水戸藩主であった徳川斉昭公と文明夫人の肖像画が掲げられていた。つまり、講堂は各校建学の精神をも示す学校の象徴的な建物であったことを意味しているといえよう。

以上のことから、落成した講堂は、公式な行事の開催や重大事項を伝達する舞台として、非常に大きな存在感を背負い各校にあったことが考えられる。

④講堂の規模－竜ヶ崎一高に残されている設計図を基にして－

最後に、竜ヶ崎一高の講堂の具体的な規模について述べる。設計図によると、桁行69尺（20.9メートル）、梁間48尺（14.5メートル）の本体に正面に3.6メートル四方の車寄せを設けている（第１表参照）。車寄せでは、エンタシス柱にコリント風の柱頭飾りを載せ、屋根にはバルコニーの手摺りを設けている。

ところで講堂の設計図であるが、現存しているのは竜ヶ崎一高に保存されているものが唯一のものと考えられている（資料①参照）。また、設計図には「茨城県立○○学校講堂新築設計図」とのみ書かれてあり、各校記念誌にはこの設計図を汎用してそれぞれの講堂を設計したと述べられている（資料②参照）。しかしながら、学校名が未記入であるため、実際に龍ケ崎中学校以外の講堂の設計においてもこの設計図が用いられたのか、本当に同規模の講堂が建てられたのかは定かではなかった。

また、水戸高等女学校の講堂は大正7（1918）年の水戸市大火災において焼失してしまっている。水海道一高の

基準／場所	設計図値	換算値
講堂縦幅	69.0 尺	20.90m
講堂横幅	48.0 尺	14.54m
正面玄関	7.0 尺	212.1cm
正面入口横幅	8.0 尺	242.4cm
正面脇口横幅	4.0 尺	121.2cm
正面玄関ポール下支石	1.5 尺	45.45cm
正面エントランス横幅	12.0 尺	363.3cm
正面エントランス縦幅	12.0 尺	363.3cm
内部一段目縦幅	15.2 尺	460.56cm
内部二段目縦幅	17.3 尺	524.19cm
ステージ縦幅	7.5 尺	227.25cm
ステージ横幅	20.0 尺	606.0cm
ステージ入口横幅	12.0 尺	363.6cm
奉安殿アーチ前階段	7.5 尺	22.725cm
奉安殿アーチ横幅	6.0 尺	181.8cm

第１表　講堂の規模
（竜ヶ崎一高所蔵設計図を基に作成）

体育館兼講堂の建設趣意書によると「講堂は生徒定員五百名収容目標をもつて」とあり、明治37（1904）年に各校に落成した講堂の収容人数は約500名であった。

4　講堂の歩み－昭和20（1945）年～昭和55（1980）年まで－

（1）講堂の最盛期－昭和20（1945）年～昭和45（1970）年－

①戦後教育制度の改変－龍ケ崎中学校から竜ヶ崎第一高等学校へ－

ア　竜ヶ崎一高の誕生

昭和22（1947）年、日本の教育制度に最大の転機が訪れる。同年３月31日の教育基本法、学校教育法の公布だ。これにより、現在のいわゆる六・三・三・四制と男女共学が始まる。

昭和23（1948）年４月龍ケ崎中学校は茨城県立龍ケ崎高等学校と改称された。翌昭和24（1949）年、現在の茨城県立竜ヶ崎第一高等学校と校名が改称される。さらに、全日制普通課程（750名）に、同年より新たに定時制普通課程（昼間授業、修業年限四年、400名）も併設され、新生竜ヶ崎一高が誕生した。水海道中学校、太田中学校でも大きな変化が起こる。

イ　水海道一高、太田一高の誕生

水海道中学校では、昭和23（1948）年に茨城県立水海道高等学校となり、全日制と定時制（昼間）の普通科が設置され、同年５月1日に新制高校第１回入学式が行われた。翌昭和24（1949）年には現在の校名である茨城県立水海道第一高等学校と改称され、同時に全日制も男女共学となった。太田中学校では昭和23年に茨城県立太田高等学校と改められたのち、翌昭和24（1949）年に茨城県立太田第一高等学校と再度改称、全日制農業科を新設した。

ウ　各校の象徴だった講堂

昭和25（1950）年代から昭和45（1970）年代までの約20年間の竜ヶ崎一高の歴史は、講堂とともに歩んできたといっても過言ではないほどに、講堂の存在は竜ヶ崎一高の学校生活の一部となり、中心となっていく。また、同じ設計者、設計図で建てられたとされる水海道一高、太田一高の講堂も各校を象徴する建物となっていく。

②創立50年から60年まで－昭和25（1950）年～昭和35（1960）年－

竜ヶ崎一高の創立50周年式典は昭和25（1950）年11月23日から４日間にわたり、華々しく行われた。23日の記念式典は野外開催となり、多数の来賓、同窓生らと職員生徒が参列して厳粛かつ盛大に行われた。

講堂は各学年と英会話部有志による演劇、音楽４作品の特設の上映舞台として24日の学内公開、25 日の一般公開で使用された。26 日の午後は同窓生の尽力により招請した藤原歌劇団による公演が行われた（『星霜百年白幡台』より抜粋）。創立50周年記念式典は竜ヶ崎一高と同時期に創立された水海道一高、太田一高各校でも大々的に行われた。

この頃の講堂は多少老朽化がみられるとはいえ、外見は壮大にして荘厳、明治期の新旧の建築技術が見事に調和した立派な佇まいであり、竜ヶ崎一高の伝統と歴史を象徴するようなものだった。入学式、卒業式などの儀式、狂言や演劇の公演が行われ、合格発表の掲示、

体育祭や毎年12月頃に行われていた文化祭の開催の場となる等、活躍の機会も多かった。

③創立60年から70年までー昭和35（1960）年～昭和45（1970）年ー

昭和35（1960）年11月23日から25日までの３日間にわたり、竜ヶ崎一高の創立60周年記念式典および記念行事が挙行された。初日23日の記念式典は講堂で盛大かつ厳粛に行われ、来賓や同窓生が多数参列した。記念事業として体育館の増築と合宿所の建設が企画され、記念行事は記念式典と同時に、生徒会が中心となり学校内を3日間にわたり公開、各部活動が催しを行った。

また、昭和35（1960）年は竜ヶ崎一高の同窓会である白幡同窓会の染谷信洋会長（高校15回生、調査当時72歳、以下染谷会長と記す）が入学した年でもある。平成28（2016）年７月２日に行った染谷会長への聞き取り調査では、当時の学校生活について詳しくお聞きすることができた。以下は染谷会長への聞き取りで得た当時の学校生活についてまとめたものである。

・当時の学校生活：クラス編成は「二重国籍」と呼ばれる、ホームルームとスクールルーム（授業を受ける用のクラス）が別だった。そのため業間休みの時間は多くの生徒が一気に教室間を移動して、さながら民族大移動だった。体育祭や20キロマラソン大会があり、マラソン大会は毎年１月15日（成人式の日）実施。同級生の女子は24名のみであった。
・講堂の使用状況：音楽鑑賞会、音楽の授業で使用。音楽の授業は１年生全員での一斉授業、週１回、月曜日に授業があった。
・部活での使用：剣道部が主に使用、野球部も雨天時、練習したと聞いている。
・講堂の外観：立派な外観だった。
・講堂との関わり：１年次の音楽の授業と音楽部の発表等以外では、日常生活であまり関係はなかった。

染谷会長は在学中文芸部に所属していたそうで、授業や行事以外で講堂と関わることはあまりなかったそうだ。また、現在でこそ講堂に対して深い思い入れと愛情を抱いているが、在学当時は講堂があるのが当たり前だったので、当時講堂に対して抱いていた思いについてはあまり覚えていないという。しかし、それは言い換えればそれだけ講堂が当時の学校生活に密着していたということであろう。

昭和37（1962）年には同市内にある竜ヶ崎二高と共催で県下高校弁論大会を行った。なお、この県下高校弁論大会は翌昭和38（1963）年、39（1964）年と３年連続で竜ヶ崎一高の講堂を会場にして開催されている。

昭和42（1967）年には創立70 周年記念事業実行委員会の第１回総会が講堂で行われた。創立70周年記念に向けて、記念式典や、記念事業、記念行事について話し合われた。

平成28（2016）年４月２日に白幡同窓会総会の場で行ったアンケート調査（全46枚回収）では、昭和35（1960）年から昭和45（1970）年の10年間に在学していた方々（14枚回収）は、講堂に対し「立派で歴史を感じた」、「威厳があった」と答える方が多かった一方、「老朽化していた」と答えた方も何名かいた。また、「講堂および木造校舎に冷暖房設備はなく、自然同様の環境で勉強をしていた」（昭和38（1963）年入学）、「生徒会主導で昼休みに校歌の練習をした」（昭和40（1965）年入学）等、当時の学校生活を語ってくださった方も

多かった。

④25年間の歴史を振り返ってー講堂の役割が変容するー

昭和20（1945）年から昭和45（1970）年までの25年間の竜ヶ崎一高の歴史を振り返ると、この時代、講堂は竜ヶ崎一高中期の歴史を支えた象徴的存在であったと言えるであろう。創立百周年記念誌等の文献やアンケート調査によって詳細に用途が確認できる年だけみても、25年の間、入学式や卒業式、創立記念式典などの主要な行事は全て講堂で行われていた。このことからも、当時の学校生活における講堂の存在は大きかったと言える。水海道一高と太田一高でも式典が行われており、各校の中心的な建物であった。

また、竜ヶ崎一高と太田一高では剣道部、水海道一高では柔道部の練習場としても使われていた。戦後には学校での柔・剣道の授業や部活はGHQにより禁止され、どちらも昭和25（1950）年に再開された。ゆえに当時十分な武道場がなかったため、３校とも講堂を使用していたと推察される。

しかし昭和35（1960）年以降、３校の講堂は儀式を執り行う場、学校生活における中心的存在から次第に衰退していくこととなる。その過程には「体育館兼講堂の建設」、「募集定員の増加」が大きく関わっていた。

（２）講堂の衰退から解体ー昭和45（1970）年～昭和55（1980）年ー

①水海道一高講堂の変遷

水海道一高では昭和33（1955）年４月から、募集定員は300 名になった。さらに、昭和38（1963）年からは、募集定員が385名となった。この一連の定員増加により、定員500名で設計されていた講堂では手狭になったと考えられる。

創立60周年記念事業には、かねてよりの念願だった体育館兼講堂の設立も含まれていた。体育館兼講堂は昭和35（1960）年４月に建設の承認を得て、昭和36（1961）年3月31日に竣工、同年５月18日に創立60周年記念体育館兼講堂竣工式が行われた。この体育館兼講堂の建設に伴い、今までの講堂（以下、３校の講堂を旧講堂と記す）は改築が行われ、内部の段差が取り払われ畳が敷かれた柔・剣道場となった。

創立70周年記念事業で老朽化した校舎に代わる新校舎と特別教室棟が建設される際に旧講堂は取り壊されることになるが、昭和43（1968）年頃から旧講堂の保存運動が活発になった。同窓会や元校長らが中心となって旧講堂を30坪ほど増築して使用する案や、校長住宅や給食室があった校庭の西南隅に移動して保存する計画などが真剣に検討された。しかし、保存場所や経費の捻出などの問題が解決できず、結局は取り壊されることとなった。

そして昭和48（1973）年４月に旧校舎群の解体工事が始まり同年５月には解体が終了、旧講堂は水海道一高から姿を消した。

②竜ヶ崎一高講堂の変遷

昭和46（1971）年２月８日に創立70周年記念並びに永久校舎竣工記念式典が「体育館」で行われた。体育館で創立記念式典が行われるのはこれが初めてである。式典後の記念祝賀会は旧講堂にて行われた。この式典開催場所の変化は、竜ヶ崎一高の旧講堂をめぐる激動の10年への幕開けだった。

昭和47（1972）年の１月17日には文化庁と県教育庁社会教育課の担当者が来校、旧講堂の情況視察を行った。文化庁は昭和45（1970）年に設置されており、この視察の目的はおそらく文化財調査で、竜ヶ崎一高と水海道一高、太田一高の講堂の保存状態を視察に来ていたものと思われる。

ア　講堂の記憶－卒業生への聞き取り調査から－

この頃の旧講堂の様子として、昭和49（1974）年入学の高校29回生の方々に、平成28（2016）年３月26日に行った聞き取り調査では、次のような情報を得ることができた。

・講堂の正面玄関は基本閉まっており、側面に出入り口があった。
・シャンデリアが残っていた。
・野球部の雨天練習場になっていた。
・吹奏楽部（？）が講堂で練習していた。
・予備室に楽器が置かれていた。
・一般生徒は体育館で集まっていた。

また、同日に行った昭和51（1976）年入学の高校31回生の方々に行った聞き取り調査では、次のような情報を得ることができた。

・旧講堂で美術の授業を行っていた。
・当時はすでに使われていなかった。

なお、聞き取り調査を行った高校31回生５名のうち、在学中、旧講堂に１度も入ったことがないと答えた方が１名いた。

イ　体育館の建設

昭和52（1977）年６月25日には、吹奏楽部のサタデーコンサートが旧講堂にて開催された。さらに、翌日６月26日には、昭和39（1964）年以来13年振りとなる県下弁論大会が開催された。この２つの行事が、創立百周年記念誌等の文献で確認できる最後の旧講堂の公式使用記録である。

同年には、ほかにも講堂に関わる大きな出来事がおこった。創立80周年記念事業の一環として、新体育館の建設が始まったのである。新体育館の工事は同年10月に始まり、翌昭和53（1978）年６月１日竣工、その日より使用を開始している。昭和32（1957）年に旧講堂の役割を担った体育館兼講堂（旧体育館）の建設から21年が経過しており、旧講堂の役割は完全に新体育館に吸収されたことがうかがえる。さらに、同年から全日制１学年の募集定員は315名になり、昭和55（1980）年には定員が945名になる見込みであった。つまり、新体育館の完成は、全校生徒900名以上を収容するには手狭であったそれまでの旧体育館に代わる新しい集会の場の完成という大きな意味をもっていた。

ウ　竜ヶ崎一高講堂の解体

昭和54（1979）年12月11日、県教育庁文化課職員による建築物検査が行われ、旧講堂の解体を県営繕課から勧められた。旧講堂の解体が決定する前、当時の校長は卒業生の誰もが「深い愛着を持つ」旧講堂を保存する方法はないかと考えていた。一つの方法として、解体して木材を保管しておき、将来造成される住宅公団の団地の中へ歴史民俗資料館を作

る時に利用してはどうかという案があがった。早速、専門家に相談してみたが、「解体して、再建するとなると、新しく作るより費用がかかる。その上、木造の古材を使っては、空調設備もできない。」と指摘された。また、検分に来た県の係官と当時の校長の間には次のようなやり取りがあったそうだ。

「太田一高にも同じ型の講堂があり、あちらの方が保存状態がよいので、県の文化財として指定される見込みである。従って、こちらは解体するのはやむを得ない、校長先生、懐古趣味だけでは困りますよ。」

「何を言うか。卒業生にとってのこの講堂に対する愛着心と思い出は他の者には分からない。単なる懐古趣味で保存方法を考えているのではない。」

「だから、八十周年記念という節目の年に取り壊した方がよいのではないでしょうか。」

（『星霜百年白幡台』382～383頁から抜粋）

当時の旧講堂は、時々屋根の瓦が落ちてきたり、窓ガラスが所々割れていたりして、老朽化が進んだ危険な状態であった。明治期の棟梁の腕と良心によって支えられてきた旧講堂だったが、取り壊さざるをえない状況であった。旧講堂に代わる新体育館も建設中であったため、結局、旧講堂は翌年昭和55（1980）年の解体が決定した。

昭和55（1980）年11月１日、創立80周年記念式典は同年６月１日に竣工された新体育館にて行われた。このとき、旧講堂を模型化したオルゴールを、創立80周年記念品として、事前予約者に１万円で頒布した。

同年10月28日、旧柔剣道場、木造校舎とともに旧講堂の解体作業が始まる。解体の様子は、旧講堂の解体当時、在校していた方々の記憶にも色濃く残っているようで、平成28（2016）年４月２日に行ったアンケート調査での昭和54（1979）年入学の34回生（旧講堂解体時二学年）の14名の方たちの回答には、当時の鮮明な記憶が書かれていた。

・あっという間に跡形もなくなった。

・衝撃的だった。（旧講堂の）保存が決まった高校がうらやましかった。

・工事中は近づくことができず、校舎２階の窓から様子をみていた。

老朽化したとはいえ、それまで威厳を失わなかった旧講堂が解体業者の重機によって瞬く間に解体されていく様子は、解体当時在校していた生徒に強い衝撃を与えたものと思われる。また、旧講堂解体時に、旧講堂周辺に生えていた、歴代の卒業生の思い出がつまった梅の木も伐採された。

同年12月２日、旧講堂の解体作業が終了する。解体作業開始からわずか１か月余りでの作業終了だった。同20日には、旧講堂とともに解体作業を開始した旧柔剣道場、木造校舎等の解体予定だったすべての建物の解体が終了した。この日をもって、竜ヶ崎一高の一つの歴史が幕を閉じたといってもいいだろう。この後、旧講堂の正面玄関のみ、木造校舎群の建物の中で唯一、解体を免れた旧図書館玄関に移築されたが、昭和63（1988）年３月５日、創立90周年記念事業の一環である白幡会館（現存）建設のため旧図書館も解体された。

こうして、明治37（1904）年の完成から長きにわたり、龍ケ崎中学校、竜ヶ崎一高とともに歴史を歩んできた旧講堂の面影は完全に消えた。現在では、旧講堂の一部の部材が倉庫にひっそりと残っているのみであり、今日、在校生で旧講堂の存在を知る人はほとんどいない。

③太田一高講堂の変遷

太田一高では昭和33（1958）年の時点で生徒定員が計1400名であったため、同時期の竜ヶ崎一高、水海道一高と比べると規模の大きな学校だった。

太田一高でも、水海道一高と同様に昭和35（1960）年の創立60周年記念の記念事業の一環として体育館兼講堂の建設が含まれており、昭和36（1961）年に竣工、記念式典が行われた。この体育館兼講堂の建設によって、ある程度老朽化が進み、収容人数500名と手狭な旧講堂の役割は完全に体育館兼講堂に吸収されたといってもいいだろう。

太田一高の旧講堂は、講堂としての役割は完全に失ったが、竜ヶ崎一高、水海道一高のように解体されることはなかった。昭和51（1976）年２月３日に、国指定の重要文化財になったのだ。

「昭和45（1970）年頃の文化財行政には、教育関係施設の保存、指定が一つもなかったことにふと気が付きました。そこで、専門家の指導の下、調査をしたところ土浦一高の本館と太田一高の旧講堂が候補に挙がりました。当時の校長と旧講堂の現状での保存を検討、文化庁など専門家による実地調査も終え、昭和49（1974）年12月23日には、県が正式に重要文化財指定の申請を文化庁に提出しました。そして、文化庁は指定を、太田一高の旧講堂は土浦一高本館とともに、昭和51年２月３日に公布したのです。」（太田一高『益習の百年』から抜粋）。

文化財指定のための調査をしていた当時は、まだ竜ヶ崎一高、水海道一高の旧講堂も現存していたが、太田一高の旧講堂がもっとも損傷が少なく、御影石の質と工法のすばらしさから太田一高の旧講堂が国の重要文化財に指定された。

その後、昭和58（1983）年頃から、創立90周年記念事業の一環として、旧講堂を太田一高の資料館として活用するという案が旧講堂整備委員会でまとまった。卒業生らに太田一高に関係する資料や、往時の教科書、ノート、書簡などの寄付を募り、同窓会より拠出された資金を使って陳列ケースやパネルを購入するなど資料館の整備を進めていった。そして、昭和63（1988）年３月26日には実行委員会を結成、平成元（1989）年11月30日に工事が始まり、平成２（1990）年８月31日に工事が完了した。現在は太田一高資料館として毎年秋に一般公開している。

（３）戦後の講堂の歴史を振り返って

終戦から解体までの竜ヶ崎一高の旧講堂の歴史を振り返ってみると、旧講堂が解体されたのは必然だったのではないかと思われる。戦後の定員増加と旧講堂の老朽化によって建設された、体育館兼講堂という旧講堂の役割を継承した建築物の存在。水海道一高、太田一高を含めた３校の講堂が文化庁と県教育庁社会教育課によって文化財保存のための調査が行われ、太田一高の旧講堂が国指定の重要文化財となったこと。さまざまな要因が旧講堂を解体へと導いたのではないだろうか。

また今回、旧講堂の調査、レポートを執筆するにあたり、同窓生の方々に聞き取り調査、アンケート調査を行ったが、調査に協力していただいた方の多くが、「旧講堂は竜ヶ崎一高の象徴そのもの。竜ヶ崎一高の伝統と歴史を感じさせる立派な建築物だった。解体されてしまったのはとても残念だ。今はもう忘れ去られた旧講堂を、今回調査してくれたことに感謝をする。」と語っていたのがとても印象的だった。旧講堂の調査を通じて、普段は

接する機会の少ない同窓会の先輩方に直接お話を聴き、在校当時の思い出を語っていただいたのは、普段の学校生活ではできない、とても貴重な経験であった。

5「まぼろし」の講堂を追って

（1）講堂展示プロジェクトの開催と展示した部材

平成28（2016）年６月４日に開催された竜ヶ崎一高での文化祭で、我々は講堂の解体時に保管された部材を展示した。当日は、竜ヶ崎一高の同窓生をはじめ在校生の保護者等約250名の方々が来場した。私たちは受付を済ませた来場者に各部材の説明を行った（本文関連資料③～⑨）。

・資料③を見ると、鬼瓦と呼ばれる部材が講堂の屋根の写真のものと一致していることが分かる。鬼瓦の外部を覆っているのはトタンであり、このことから常に雨風に晒されていた部材であることもうかがえる。

・資料④は講堂正面入口前エンタシス様柱、先端の装飾部分である。竜ヶ崎一高にある部材は上部の装飾が無くなってしまっているが、細かな木材の彫目などが現存していた頃の写真と一致している。

・資料⑤は講堂内部中央上部の装飾である。この部材は右側半分が欠落してしまっている。しかし、講堂内部の写真に写っている部分と中央にある２つの花びらの枚数、その左右にある羽の様な彫目や上部の貝殻状の部分の突起の数が一致している。

・資料⑥は講堂内部中央部分上部の装飾である。内側のドーナツ状の円がどちらの写真も５つと一致していて、規則的についた突起物も見られる。

・資料⑦は講堂内部中央の柱上部の装飾である。部材中央上部の花の様なものが講堂内部の写真の部分と一致している。また木彫りによるアカンサスの装飾も、どちらの写真からも確認できる。

・資料⑧は講堂内部中央の柱下部の装飾である。壺の様なものの数および形状が一致している。

・資料⑨は講堂奉置所上部の装飾である。こちらは設計図との比較になるが、中央部にある２つの花びらの枚数がどちらも４枚であること、上部の貝のような装飾の形状、羽のような彫目などが一致している。

（2）水海道一高での調査

同じ設計図で建てられたとされる各校の講堂を比較する。私たちは平成28（2016）年７月25日に水海道一高へ調査に行った。水海道一高には講堂に関する多数の資料や数個の部材があった。

①竜ヶ崎一高講堂部材との比較

残されている講堂外観の写真を比較すると大きさやデザイン、色、材質が一致している。外見がほぼ同じということが講堂外見比較の写真から分かる（補助資料その１参照）。部材の一致点としては、資料⑩、資料⑪、講堂の近くに設置されていた半鐘（資料⑫）が同じ部材であるということが確認できる。しかし、細かい寸法やデザインは相違点があり、特に資料⑩、⑪には花びらの枚数や傾斜部分のデザインの相違が見られる。また、調査に

て水海道一高に残っていた部材と竜ヶ崎一高のものを比較したところ、デザインはほぼ一致したが、細かい部分（花びらの種類や数、彫り方）に違いが見られた。また部材を計測したところ、数センチメートルの誤差があった。このことから寸法やデザインは建築を任された棟梁に一任されていたことが推察される。

②まとめ

比較結果より、竜ヶ崎一高と水海道一高それぞれの講堂の外観は一致しているが、部材のデザインと寸法に差が見られることから､細部は一致していないことが明らかになった。

（3）太田一高での調査

①各校の講堂を画像で比較する

まず、資料⑬の４校の屋根の上の『鬼瓦』を比較する。いずれの鬼瓦も貝の形に似た造りである。しかし、同じ設計図で作ったにも関わらず、形状や大きさ、装飾の違いがはっきりと確認できる。このことから、同じ設計図で基本的なレイアウトは同じものの、デザインや細かな彫目などは一任された棟梁の独自のセンスで建設されたものであるということが推察される。

資料⑭、⑮は講堂内部の左側柱及び壁面の装飾比較である。各校のいずれの装飾もそれぞれ異なっている。大まかな部位の配置や装飾の枠取りは一致している。写真を比較してみると、竜ヶ崎一高の柱上部の装飾は他の３校の装飾に比べて彫り方が浅い。また壁面下部の装飾も４校それぞれで彫られているデザインが若干異なる。

資料⑩は講堂内部正面上部中央部分である。部材中央部分の花の形が３校どれもデザインが大きく違っているのが分かる。竜ヶ崎一高は５輪の花、水海道一高は竜ヶ崎一高と同じ５輪の花であるが花びらの面積が広く、桜の花のように見える。一方、太田一高は４輪の花となっている。３校を比べると水海道一高のデザイン、装飾が他の２校に比べて細かく、彫りが深い。

資料⑪は講堂玄関エンタシス柱上部の装飾部分である。竜ヶ崎一高の部材は上部が欠落しているが、太田一高や水海道一高の部材のように装飾はあったと考えていいだろう。太田一高と水海道一高を比較すると、エンタシス上部、花の装飾部分に違いが見られた。水海道一高の花の装飾は、太田一高に比べて細かい装飾である。また、エンタシス下部、葉の様な装飾は、水海道一高と太田一高では彫目に違いがみられ、太田一高の方が装飾が大きい。

②竜ヶ崎一高にある設計図で講堂を計測する

今回の計測をするにあたり、まず最初に私たちは竜ヶ崎一高にある設計図が尺寸の単位で記載されているので、メートルの単位に換算をすることから開始した。そして、太田一高での実測結果が以下の第２表の通りである。

表に見られるように外周が設計図と完全に一致した。以降全ての測定を柱の中心から行った。次に、正面玄関の測定を行った。正面玄関の誤差は0.9cm、玄関入口横幅が0.6cm、正面に1.3cmの誤差が見られた。また正面連絡通路のポール支柱の石土台の外周は設計図の測定値と一致した。さらに、内部の測定を行った。内部の床は三段構成になっており、

場所	設計図値	太田一高	誤差
講堂縦幅	20.90m	20.90m	なし
講堂横幅	14.54m	14.54m	なし
正面玄関	212.1cm	213.0cm	0.9cm
正面入口横幅	242.4cm	243.0cm	0.6cm
正面脇口横幅	121.2cm	122.5cm	1.3cm
正面玄関ポール下支石	45.45cm	45.45cm	なし
正面エントランス横幅	363.3cm	363.0cm	0.3cm
正面エントランス縦幅	363.3cm	363.0cm	0.3cm
内部一段目縦幅	460.56cm	460.0cm	0.56cm
内部二段目縦幅	524.19cm	523.5cm	0.69cm
ステージ縦幅	227.25cm	224.0cm	3.25cm
ステージ横幅	606.0cm	622.8cm	16.8cm
ステージ入口横幅	363.6cm	375.5cm	11.9cm
奉安殿アーチ前階段	22.725cm	22.7cm	0.025cm
奉安殿アーチ横幅	181.8cm	194.5cm	12.7cm

第２表　太田一高講堂の測定結果と設計図との誤差（2016.8.1 計測）

入口から奥にいくにつれて下がっている。内部入口側から１段目、２段目、３段目は約0.6cmの誤差と、比較的誤差は小さかった。

最後に、３段目一番奥のステージの測定を行った。ステージ縦幅の誤差が3.25cm、ステージ横幅の誤差は16.8cmと大きな誤差が見られた。また、奉安殿アーチも設計図と12.7cmものズレが生じていた。また、竜ヶ崎一高、太田一高、水海道一高、水戸二高、４校の奉安殿アーチの上部、左右に配置されているドーナツ状の装飾の円がそれぞれ５つある。設計図ではドーナツ状の装飾は円が４つの配置になっており、非常に大きな相違点であるといえる。

以上、今回の測定結果より、一般に言われているように太田一高の講堂は竜ヶ崎一高にある設計図をもとに建設されていたということが証明された。しかし、講堂内部の測定値に設計図との相違点が見られたということは、内部の寸法やデザインはその土地で建築を任された棟梁による独自の判断、技量に一任されていたといえよう。そして、指摘した設計図を基にした講堂内部の測定結果で明らかになった「誤差」はこれまで誤も指摘しておらず、私たちが初めて指摘したのではないかと思われる。

③まとめ

最後に、資料⑯の４校の学校配置図を見てほしい。４校とも正門から向かってちょうど正面に講堂が建っていることが分かる。この配置から、講堂は当時の旧制中学校において「学校の顔」であり「学校全体の象徴」であったことがうかがえる。

この項目では、以下の３点について新たに発見もしくは仮説を証明することができた。

ⅰ）講堂展示プロジェクトで展示した部材と設計図にある部材の箇所との一致

ⅱ）水海道一高での調査で発見した水海道一高の講堂の部材と竜ヶ崎一高の部材の一致（ただしデザインには相違点が見られた）

ⅲ）太田一高の現存している講堂での実測及び部材調査での竜ヶ崎一高の設計図、部材の一致（ただしデザインには相違点が見られた）

6　おわりに

太田一高の講堂が資料館として残っていると知ったのは、研究を始めてしばらくしてからである。すでに講堂は歴史の中だけの存在だと思っていたので、その事実を聞いてもあまり実感はわかなかった。そもそも、今回の研究自体が私たちの学校から講堂が失われていたからこそ実現したものであった。しかし、この研究の中で一番感動した瞬間は、太田一高の資料館を実際に見た時である。それまで資料だけでイメージしていたもの、思い出としての存在であった講堂が私たちの目の前に建っているという事実は、奇跡のような体験であった。

私たちの研究は、まず、竜ヶ崎一高の白幡同窓会役員の方々への聞き取り調査から始まった。平成28（2016）年３月末のことである。この調査は、のちの研究の大きな原動力となった。同窓生の方々の熱意が私たちに伝わってきたからである。また６月４日に行われた竜ヶ崎一高文化祭での部材の展示に際して、同窓生の方々のみならず地域の方々の激励を受け、研究を次の段階へ進めることができた。

同年７月25日、水海道一高で現地調査を行った。水海道一高は、竜ヶ崎一高と同じく、講堂が解体された学校であり、講堂をめぐる状況は同じように思われた。しかし、そこには微妙な違いがあった。まず、竜ヶ崎一高よりも講堂の写真資料が多かった。また、竜ヶ崎一高に残されていたものと同じ部分の講堂の部材が残されており、そこにはデザインの微妙な違いが見受けられた。形は違えど、講堂を思う気持ちによって高校に資料が残されていて、同じ部材から見られるデザインの違いを確認することができた。

同年８月１日、太田一高の現地調査に向かった。写真で見るよりも立派な講堂の佇まいは、それまでの研究で調べてきた特徴を持ちながらも、言葉では語りきれない雰囲気があった。

今回の研究対象とした講堂の歴史について、私たちは資料に記された講堂にまつわる出来事の裏側を詳細に知ろうと努めてきた。その結果、４校を比較することでその出来事が時代の流れによって生じたものなのか、もしくはその高校独自の動向であったのかを知ることができた。そして、講堂が建っていた当時の生徒である同窓生の方々の話を聞くことにより、当時のひとつひとつの出来事がどのような意味を持って、生徒たちにどのような影響を及ぼしたのかについて知ることができた。時代によって「生徒がもった印象」は様々であり、その役割も多岐に渡ったが、どの時代にも講堂は、「学校の象徴」として生徒の学校生活に寄り添っていたのだ。

私たちの研究には一つの大きな発見があった。竜ヶ崎一高に残っていた設計図を基に実測したことである。太田一高の講堂を実際に測定してみたところ、外周の寸法は設計図と一致していた。ところが、内部の細かい部分の寸法が異なっていること、各校の講堂によって装飾のデザインが微妙に異なることが明らかとなった。このことから、大枠は設計図に従いながらも、細かい部分に関しては、建築を請け負った棟梁たちの裁量によって決まっていたということがうかがえた。この発見は、私たちが確認したどの資料にも掲載されていない新たな事実だ。

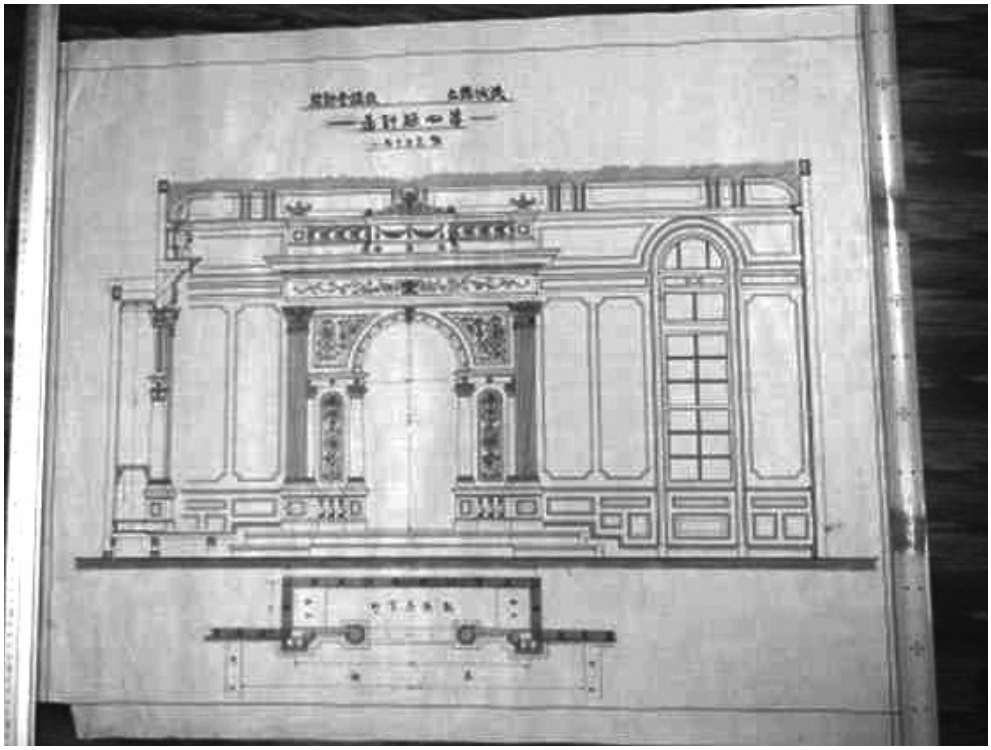
私たちは講堂の研究を通して、その歴史を追うことで自分たちが通う学校の伝統やこれまでの学校教育の変遷など、普段学校生活を送っていては知ることのない「古き学校の姿」を知った。そして私たちはこの知識を、竜ヶ崎一高と同じく講堂が建っていたほかの高校の生徒たちをはじめとするたくさんの人たちに発信していく責任があると考えている。同

窓生の方々がその思い出を語ってくれたように、私たちは自らが通う学校の存在する意義を、次の世代に語り継ぎたい。

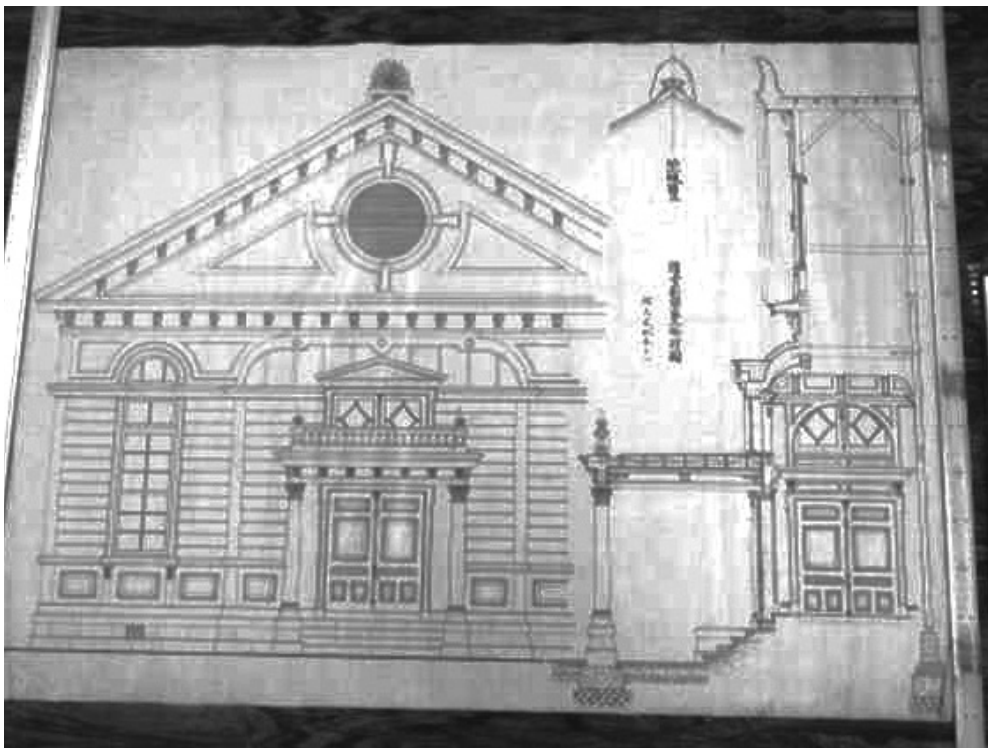
参考文献

・『茨城県の近代化遺産』茨城県教育委員会、平成19年
・『益習の百年』茨城県立太田第一高等学校百周年記念実行委員会、平成12年
・『常総の歴史』第22号、崙書房、平成11年
・『常陽藝文』2000年12月号、財団法人常陽藝文センター、平成12年
・『星霜百年白幡台』茨城県立竜ヶ崎第一高等学校創立百周年記念事業実行委員会、平成13年
・『済美百年』茨城県立水海道第一高等学校創立百周年記念事業実行委員会、平成22年
・『水戸二高七十年史』水戸二高七十周年史編さん委員会、昭和45年
・『水戸二高百年史』茨城県立水戸第二高等学校百周年記念実行委員会、平成12年

《本文関連資料》



資料①　講堂設計図（その１）



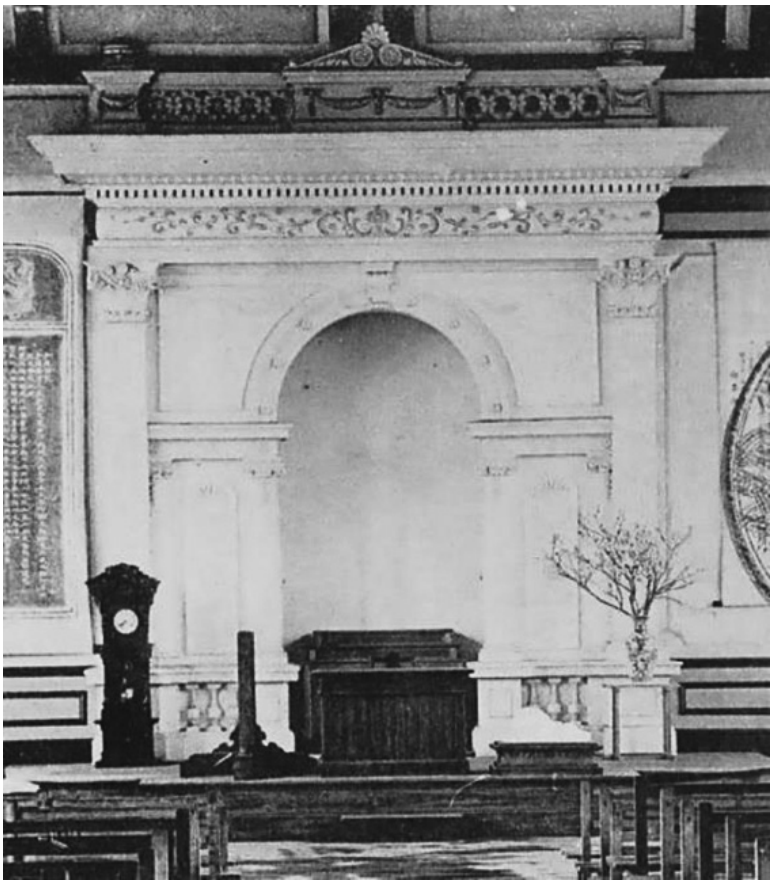
資料②　講堂設計図（その２）講堂正面中央右側に縦書きで「茨城縣立○○講堂‥」とあり、校名が空欄になっており記されていない

「鬼瓦」拡大図

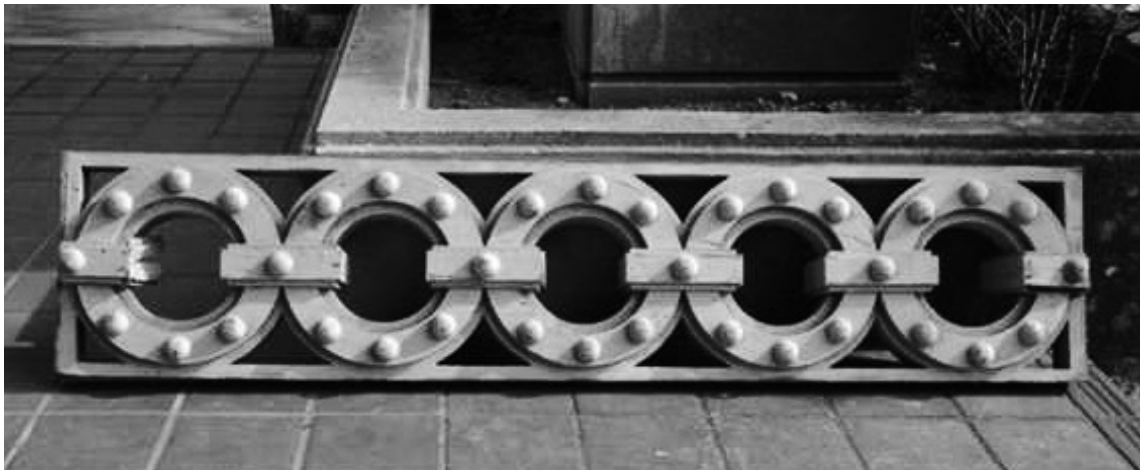
資料③　講堂展示プロジェクト展示物（1）「鬼瓦」

資料④　講堂展示プロジェクト展示物（2）「正面入口前エンタシス様柱、先端の装飾部分」
※柱は倉庫に保存されている

「講堂内部中央上部の装飾（1）」拡大図



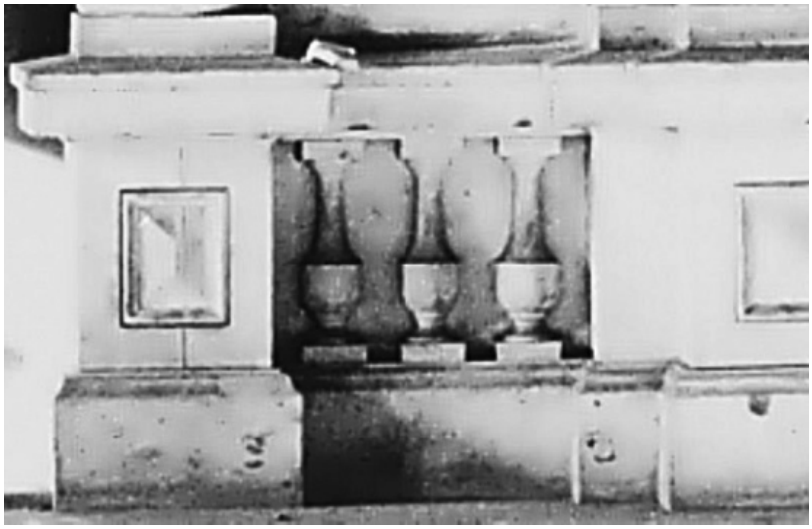
資料⑤ 講堂展示プロジェクト展示物（3）「講堂内部中央上部の装飾（1）」



資料⑥　講堂展示プロジェクト展示物（4）「講堂内部中央上部の装飾（2）」

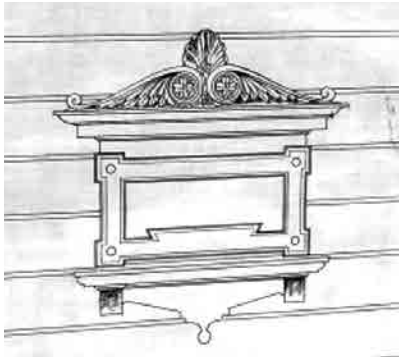
「講堂内部中央の柱上部の装飾」拡大図

資料⑦　講堂展示プロジェクト展示物（5）「講堂内部中央の柱上部の装飾」

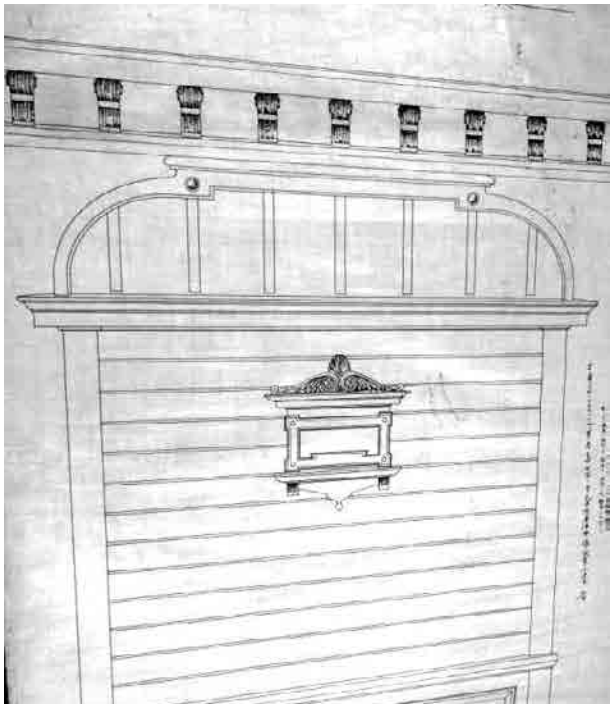


資料⑧　講堂展示プロジェクト展示物（6）
「講堂内部中央の柱下部の装飾」

「講堂内部中央の柱下部の装飾」拡大図



「講堂奉置所上部装飾」拡大図



資料⑨　講堂展示プロジェクト展示物（7）「講堂奉置所上部装飾」

資料⑩　講堂内部の装飾比較（1）（正面上部中央部分）

竜ヶ崎一高部材

水海道一高部材

太田一高部材

資料⑪　講堂玄関柱上部装飾比較

水海道一高所蔵

太田一高

竜ヶ崎一高所蔵　※最上部の装飾が欠損

資料⑫　半鐘比較

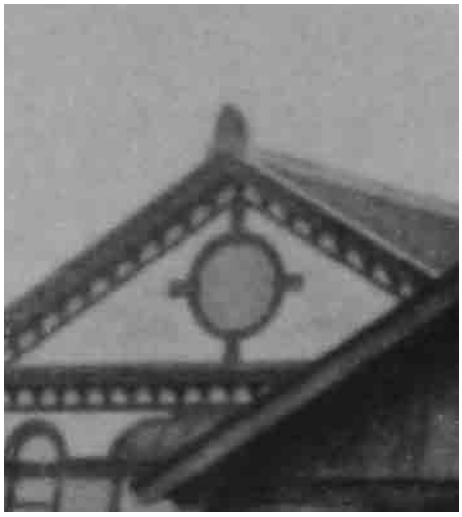
竜ヶ崎一高所蔵

水海道一高所蔵

資料⑬　「鬼瓦」比較

水海道一高

太田一高（「棟飾り」と紹介されている）



水戸二高

竜ヶ崎一高（「鬼瓦」とよばれている）

資料⑭　講堂内部の装飾比較（2）（左側壁面装飾）

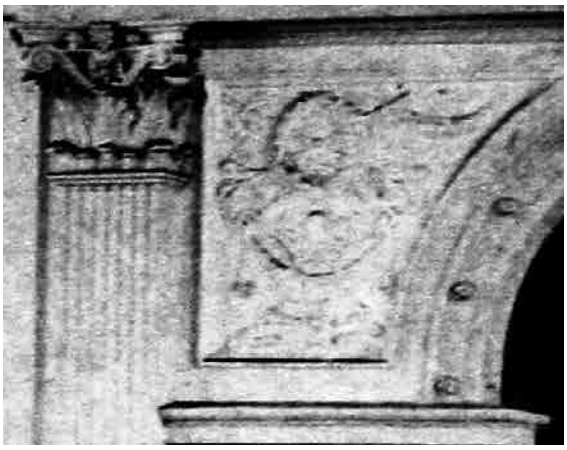
竜ヶ崎一高

太田一高

資料⑮　講堂内部の装飾比較（3）（左側柱および壁面装飾）

竜ヶ崎一高

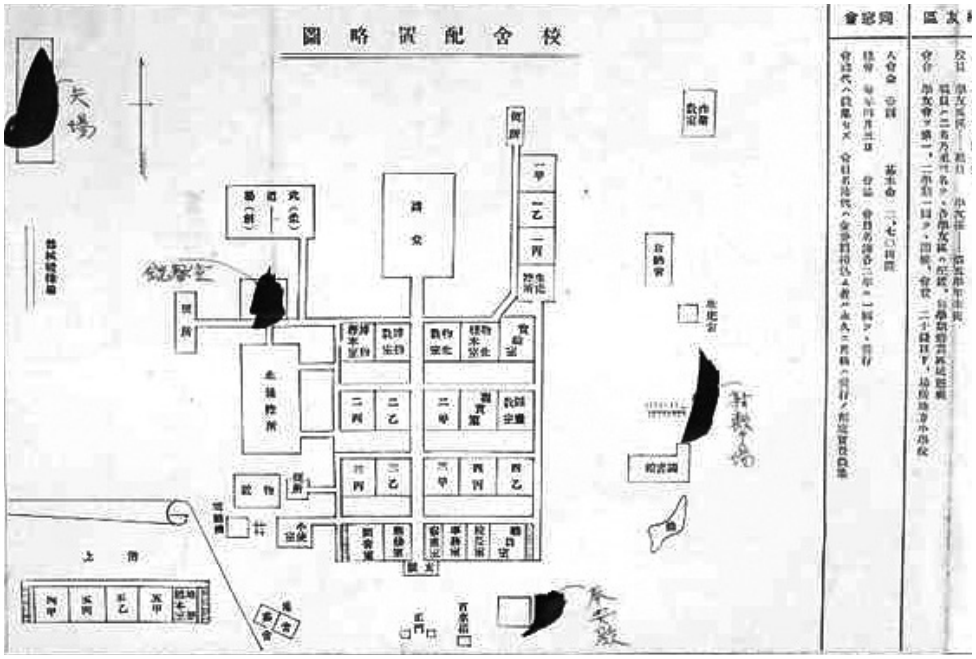
太田一高



水戸二高

水海道一高

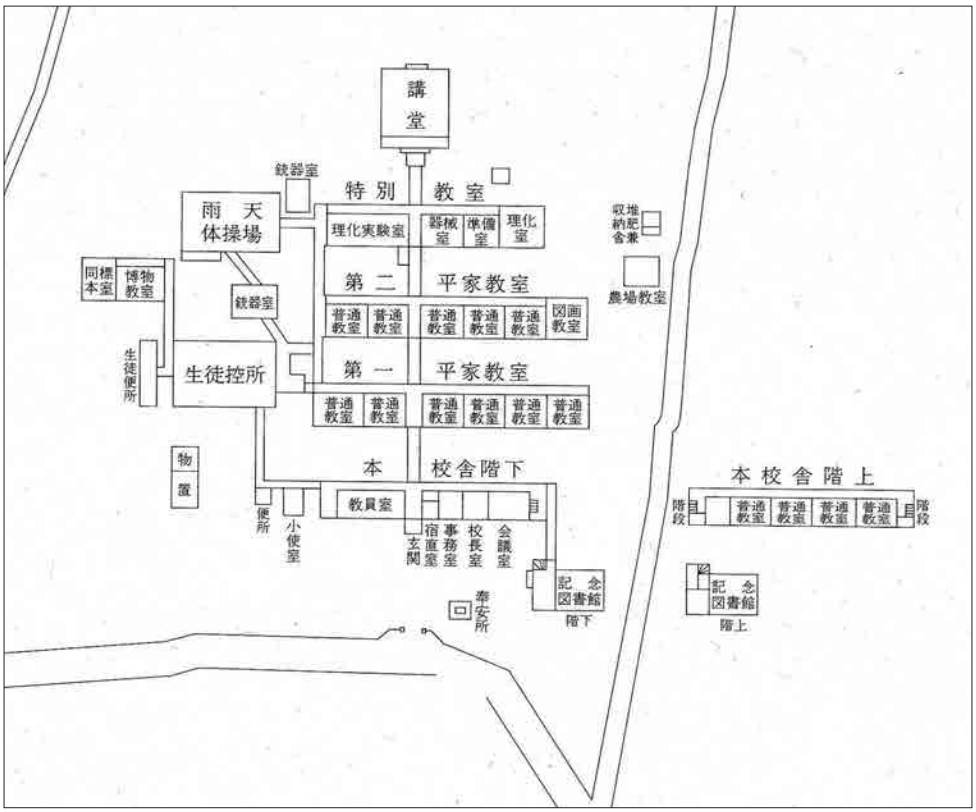
資料⑯　校舎配置比較（その１）



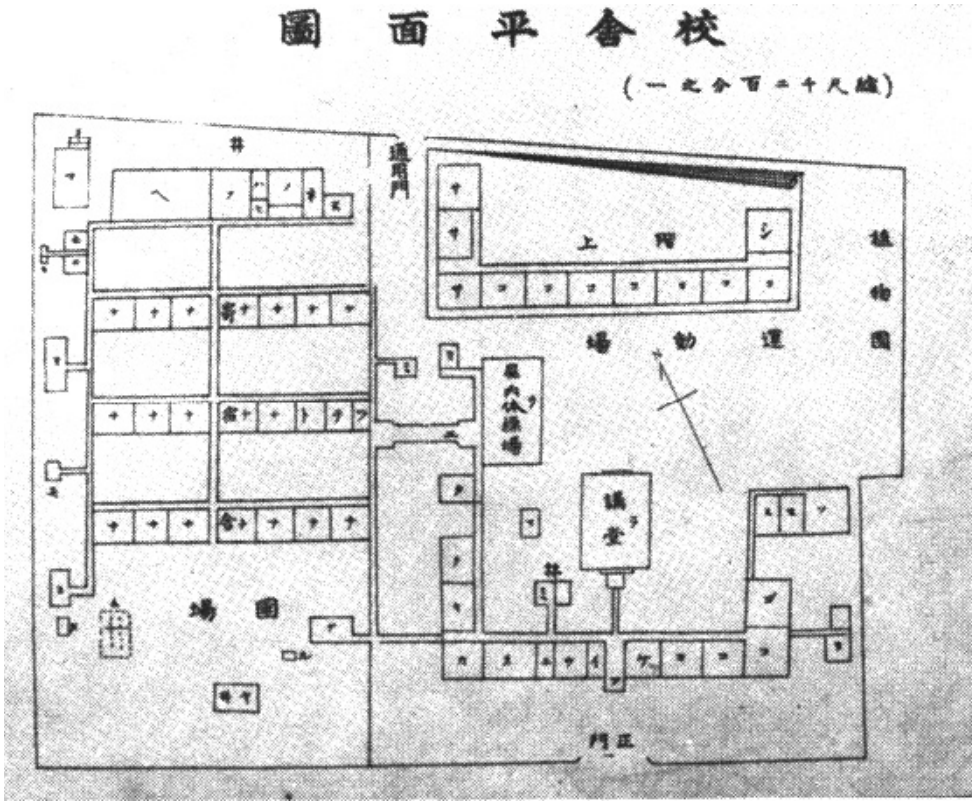
校舎配置図（龍ケ崎中　木造校舎時代―戦後のものか―）

校舎配置略図（水海道中　昭和 12 年）

資料⑯　校舎配置比較（その２）

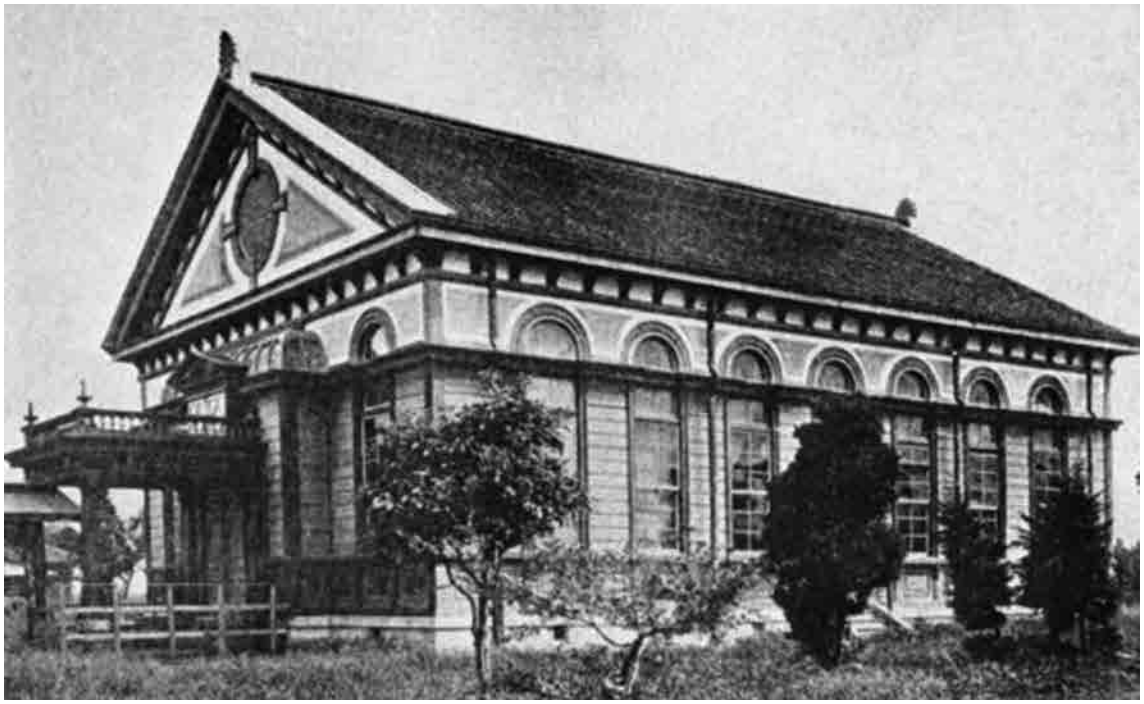


茨城県立太田中学校教室図面（太田中　昭和 18 年）

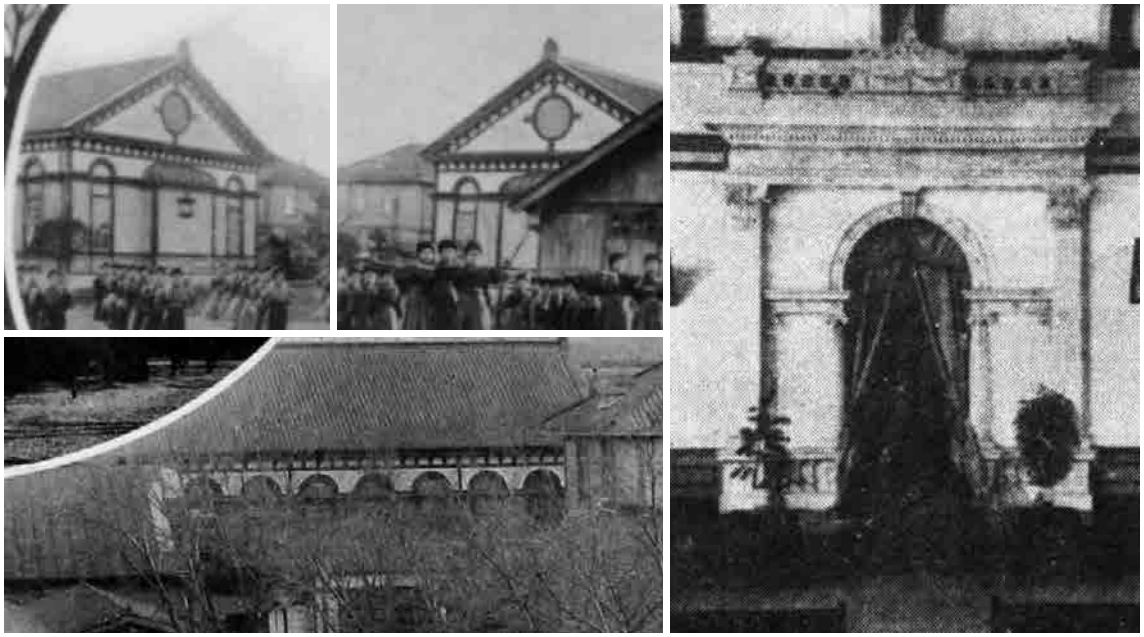


校舎平面図（水戸高女　大正７年まで）

《補助資料》その１－１　各校の講堂



初期の講堂のすがた（水海道一高講堂　水海道一高蔵）



水戸高女講堂（「絵葉書」、「卒業記念帖」大正７年３月より抜粋）

《補助資料》その１－２　各校の講堂

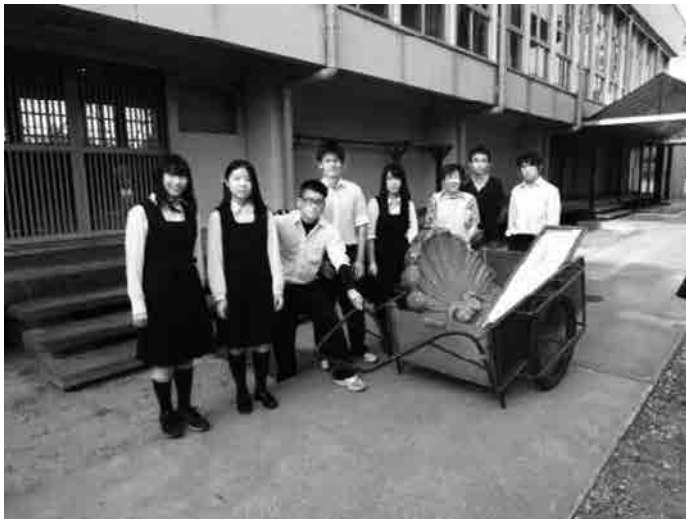
水海道一高講堂（昭和 40 年代　水海道一高蔵）

竜ヶ崎一高講堂（昭和 50 年代　竜ヶ崎一高蔵）

太田一高講堂（平成 28 年 8 月＝現存　国の重要文化財指定（昭和 51 年））

同窓会総会でアンケートの呼びかけ（4.2 竜ヶ崎一高体育館）

設計図の閲覧（5.27 竜ヶ崎一高小会議室）



講堂部材の搬出作業（5.19 竜ヶ崎一高体育館前）

講堂展示プロジェクト（6.4 文化祭）

講堂展示プロジェクトスタッフ（6.4 展示教室にて）

高校 10 回卒業生聞き取り調査（6.18 龍ケ崎市内）

高校７回卒業生アンケート調査（7.10 龍ケ崎市内）

現地調査（7.25 茨城県立水海道第一高等学校）

現地調査（8.1 茨城県立太田第一高等学校）

御成小学校の移転と改築

逗子開成高等学校２年　辻（つじ）　祐哉（ゆうや）

私が卒業した鎌倉市立御成小学校は鎌倉駅から徒歩二分ほどのところに建っている小学校だ。その堂々として立派な校門は人力車が前に停まって観光客に説明するほど見事なもので、観光客が立ち止まって写真に収めることが多くあり、鎌倉に訪れた際にはぜひ一度ご覧になっていただきたいくらいだ。さて、そんな御成小学校には過去に長い市民運動が起こるまでの事件があった。私がその事件を意識するようになったのは八月に入ってからで、鎌倉市内で行われた、現在と昭和の鎌倉の町の写真を比べた展示を見た時である。その展示には御成小学校の写真もあり今とは違う、改築前の校舎が写っていた。そこで私は御成小学校にはかつて改築の際に行った発掘調査で大規模な遺跡が発掘された、ということを思い出したのだ。

御成小学校は昭和八年十二月に鎌倉市の三つ目の小学校として誕生した。生徒数の増加が理由で建設され、本来ならば「鎌倉市立第三小学校」と命名されるはずだが、この小学校が建てられた土地は皇族が御成りになった御用邸の跡地であることから「鎌倉市立御成小学校」となった。御用邸の跡地であった広い土地を活かし現在にも小学校でも稀に見る広い校庭がある。校門も御用邸が建っていた頃から使われ、掛かっている門札は俳人・高浜虚子の書である。校歌に「松の翠につつまれて」とあるように校地にはたくさんの松があった。松だけではなくまるで校庭を見守るかのように植えられた大きなケヤキの木や御成山があり緑が豊かな学校だった。校庭の西側には斜面の急な丘くらいの大きさの山（通称：御成山）がありその昔は児童の遊び場となっていたそうだ［ⅰ］。また、校地内にあった諏訪神社や諏訪森は御成小学校校歌に「池水清き諏訪の森」と歌われるほど豊かな環境があり、「鎌倉御成町いまむかし」によると当時は理科の植物観察、小動物の生態観察、美術の写生といった豊かなものを生徒にもたらしたそうだ［ⅱ］。そんな中、昭和五十年代には木造校舎の痛みが目立ちだし、老朽校舎の熔印を押された。そして五十八年に三号校舎が火災により消失してしまったこともあっただろうが突如、木造校舎全てを耐震、耐火のため鉄筋コンクリートへ変えるという計画が現れた。その上鎌倉市は工事期間中にプレハブ校舎で生徒に授業を受けさせるのは好ましくなく、校舎の地下には六層～七層ほどの大規模な遺跡があるため発掘調査に手間取り、問注所の遺構などが発掘されれば工事中止になりかねないが校庭の下には一層ほどの遺跡しかないので作業が早く進む、という理由から校舎を西側にある御成山へ移し現在の校舎のあるところを運動場にするという案を出した［ⅲ］。これが市民運動の始まりだった。鎌倉市の校舎移設の案を知った市民らは「文化財と周囲の環境が一つに溶け合っていてこそ、古都の面影をしのぶことができるのではないか」などの校舎を西側に移設し木造校舎を鉄筋コンクリートに作り変えることに反対する声を上げ、その後「単なる一小学校の改築の話ではない。歴史的景観を保存する使命を市民として果たさなければならない」と、『御成小学校移転改築を考える会』を結成しわずか一ヶ月あまりで再検討に賛成する一万三千七百五十七名の署名を集め、陳情書とともに鎌倉市へと提出した［ⅳ］。鎌倉市へ御成小学校の移転改築の説明を何度も求め、

矛盾点を解決していった。そこで新校舎のデザインをめぐって新たな問題が発生した。新校舎のデザインは鉄筋コンクリートで考えられており、市民は木造校舎の美しい外観、内装を愛していた。構内では遺跡が発掘され、その保存と校舎改築を両立するための市民運動へ変わった。市民はこの豪華すぎるデザインに子どもに何を教えられるのか、なぜ御成山の前の地盤の悪い土地に建てるのか、本当に子供のためを思うのなら歴史の証の大切さを教えて欲しい、と教育委員会に訴えた。その結果当初の計画は大幅に変更され、元の校舎があった位置に、改築前の木造の外観の趣を残したまま内部にバリアフリーを取り入れた設計やオープンスペースを作った近代的かつ機能的な学校が完成した。発掘された遺跡は再び土の中へと戻った。こうして御成小学校の移転改築をめぐる市民運動は市民にとって良い結果で終わった。私はこの市民運動にとても感謝している。反面、疑問に思うところがある。それは鎌倉市が出した御成小学校の移転改築案で校舎を西側に移動する理由である。市民運動の結果大幅に変更された、というところに鎌倉市の理由のもろさが見える。この理由を検証してみようと思う。

鎌倉市は校舎を西側に移転する理由を

1）工事期間中にプレハブ校舎で生徒に授業を受けさせるのは好ましくないから

2）校舎の地下には大規模な遺跡があるため発掘調査に手間取り問注所の遺構などが発掘されれば工事中止になりかねないから

と発表した。まずは理由その一。工事期間中にプレハブ校舎で生徒に授業を受けさせるのは好ましくないというのは一理ある。しかし、ただ好ましくない、というだけであって校舎の移転の決定的な理由にはならないだろう。またプレハブ校舎で授業をする、ということは校舎を御成山側に移転する、ということであるのは言うまでもないが私は校舎を果たして移転する必要があるのか、というところから考えていこうと思う。校舎は痛みが目立ち「おんぼろ」とまで言われたほど［ｖ］であることから痛みが相当なものだったことは容易に想像出来る。木造校舎で痛みがひどいのは致命的である。よって建て替えの必要があることになる。しかし建築学会から保存の要望があるほどの文化財を全て壊して無の状態にすることはない。そのような由緒ある木造校舎の中で教育を受けることに鎌倉の風土と良い環境が感じられるという効果があり、私自身がそうであるようにその学び場がそこに通う児童の誇りになるのではないか。実際に木造建築の専門家数名が市の教育委員会の依頼を受けて御成小学校の屋根裏に入り、実態調査をした報告には構造上大変立派で丈夫な建物だ、ということが証明されている［vi］。さらに外見も建物を作る技術も文化財的価値が高いとまでされた。校舎の修復も可能ではないだろうか。校舎には上等な木材が使用されている［vii］。良い素材を残しながら建築基準法に反しない建物に生まれ変わらせることができるのだ。例を挙げるならば鎌倉文学館がそうである［viii］。当時の校庭に校舎を立てれば東から陽が当たらず御成山の緑が失われるだろう。土砂災害も考えられる。土砂災害対策に山の斜面にネットをかければ児童の遊び場だって失われる。また鎌倉市には鎌倉の歴史的な町や環境をできるだけ保全する義務がある。鎌倉市の見通しでは校舎のあるところに新校舎を建てるとなるとプレハブ校舎で授業を三年六ヶ月間することになるが、果たしてこの三年間半のために学校から風土を学べる環境や校庭の緑を失い、由緒ある校舎も失っていいのだろうか。

遺跡についても考える必要がある。鎌倉市の調査によると前述した通り校舎の下には六

層～七層ほどの遺跡があり校庭の下には一層ほどの遺跡があるため時間を考えて発掘作業に時間のとられない校庭側に校舎を立てることにした。しかし驚くべきことに遺跡の試掘は校地約四万㎡のうちわずか五箇所しかされていなかったのだ［ix］。鎌倉市はこのたった五箇所の結果だけに頼って移転の理由としていた。その結果、実は鎌倉市は市民が反対している間に校庭に校舎を建てるために基礎工事を行っていたのだが、その時に校庭に大きな遺跡を発掘してしまったのだ。その規模を説明すると総面積六千㎡もある鎌倉時代以前の郡衙の遺構でありその中には一級武士の武家屋敷や周辺の庶民の生活区域も含まれていた。

この大規模な郡衙の遺構は全国的にも大変珍しかった。鎌倉はどこを掘っても遺跡が出るというのは当たり前のことで、市は校庭に校舎を建てるために遺跡を破壊しようともともと決めていたため当然反対の声が多く上がった。私はこのような破壊の行動に鎌倉の風土を守ろうとする意思はないように思える。くどいかもしれないが鎌倉市には鎌倉の歴史的な町や環境をできるだけ保全する義務がある。今回はその「できるだけ」に当てはまるだろう。それに校庭の下に遺跡が埋まっていることは素晴らしいではないか。眠る遺跡の上で遊ぶのは素敵であるように感じる。緑の御成山とともに眠る遺跡のある校庭を校舎から眺められる、そこに鎌倉の良い環境・風土があるのではないか。

鉄筋コンクリートの校舎についても考える。市は木造の校舎では火や揺れに弱く、木材が手に入れにくいため鉄筋コンクリートの校舎を立てることを計画していた。しかし実は木材の方が揺れに強く火災は内装の内側に不燃材を組み込めば良いのだ。木造校舎で建築基準法に適合したものを作ることも可能。文部省も当時教育助成局長が都道府県教育長に「学校施設における木材使用の促進について」という題で

・木材は柔らかで温かみのある感触を有するとともに室内の温度変化を緩和させ快適性を高める等優れた性質を備えている
・特に、建築仕上げ材として、適所に木材を使用することにより温かみと潤いのある教育環境づくりが期待される
・地域の風土や文化、産業に即した施設づくりという観点から、建物の規模、用途に応じて木造建物を計画することも意義がある

という内容のものを提出している［ｘ］。このように教育の場で「木造」が再確認されてきた時代だった。鉄筋コンクリートは当時「荒廃するコンクリート」と呼ばれたほど老朽化が問題になり［xi］、三十年も経たないうちに建て替えが必要になるだろう。木造二階建ての校舎は御成山との景観を融和させることができるはずだ。さらに遺跡と共存できるのは木造校舎だ。なぜなら建物の軽量化が可能で杭を打たない方法で遺跡を傷つけることがないからだ。旧校舎の材料を可能な限り再利用することもできる。以上の理由から私は木造校舎の建築または修復に賛成する。

これまで私は鎌倉市の原案の疑問と意見を述べてきた。私は約二十五年前の市民活動に感謝している。当時はなぜ市民や卒業生が口を出すのだ、と言われて在校している児童と将来の子どもたちに良い環境と校舎を与えたい、と言ってきたそうだ。しかしこうした紆余曲折があったから市民の声が十分に反映された立派な校舎ができたと私は思う。鎌倉市では先日まで市民運動があった。御成小学校の講堂とその隣にある旧鎌倉市図書館をとり壊そうとする市に反対していた。今鎌倉市ではもうほとんど古都鎌倉の面影を見る事はで

きない。すべて取り壊されてきた。鎌倉市は環境、時代、風土よりも工費や工期という市の都合だけを考えたのだろう。しかしあれだけ古都鎌倉と謳い、世界遺産にも登録しようとしていた市がその姿勢でいいのだろうか。繰り返しになるが鎌倉市には歴史的な町並みや環境をできるだけ保存する義務があると思うのだ。鎌倉の町は鎌倉にしか残ってない。それを忘れてはならないのだ。

註

［ｉ］『昭和の鎌倉　私の思い出』今田正廣、かまくら春秋社、2006年
［ii］『鎌倉御成町いまむかし』「鎌倉御成町いまむかし」編集委員会、冬花社、2008年
［iii］同上
［iv］同上
［ｖ］「かまくら春秋№.186」1990年５月21日
［vi］「御成小学校移転改築を考える会会報　№.34」1987年11月12日
［vii］同上
［viii］同上
［ix］「御成小学校移転改築を考える会会報　№.１」
［ｘ］「かまくら春秋№.188」
［xi］「御成小学校移転改築を考える会会報　№.34」1987年11月12日

国学と水戸学の比較　－本居宣長の業績を再検討する－

茨城県立竜ヶ崎第一高等学校３年　布施（ふせ）　晴香（はるか）

はじめに

このテーマについて論文を書くことになったきっかけは、小学校高学年の頃から本居宣長が好きで、記念館に何度も足を運んだり関連書籍を読んだりするうち、日本古来の心を明らかにしようという国学の考え方にも好印象を持ったことだ。また水戸学が盛んだった頃の面影を残す資料に出会い、水戸学にも興味を持った。そこで国学を実用してはいけないと説いた本居宣長と尊王攘夷運動を行った水戸学、両者を比較してみたいと思った。

本居宣長は古代から日本人が持っている日本人本来の心、つまり「やまとごころ」を解き明かすことを重視していた。その中には尊王思想も含まれる。しかし宣長は学者だ。国学の研究は学者としての純粋な好奇心に従って行っていたのであり、それを社会貢献に使おうとは思わなかったのではないか。

対して水戸学は、開祖が徳川光圀（前期水戸学）、徳川斉昭（後期水戸学）と武家の人間だ。藩校や郷校を通して武士たちの間に広まって武家向きの性格を強めていき、そこへ幕府が揺らぎ始めた時代背景が重なり、尊王思想が尊王攘夷運動、討幕運動へと発展したのではないか。

以上の考察を以って、私は、両者は学者と武士という立場の違いによって、同じ興りでも全く異なる発展を遂げたのではないかと仮説を立てた。

研究には国学の本や宣長の著書の現代語訳、インターネット、本居宣長記念館で聞いた吉田悦之先生のお話を参考にした。

第一章　国学

まず、そもそも国学とはどのような学問か。

国学の始まりは諸説あるが、幕末の国学者、河喜多真彦の『名家年表』によると、徳川光圀が契沖に『万葉集』の翻訳を依頼したことだとされる。契沖が『万葉集』の全ての歌に読みと注釈を付け、『万葉代匠記』を著したのをきっかけに、古代の書物を読み解こうという動きが起こったのだという。契沖に依頼した徳川光圀は、前期水戸学の創始者だ。つまり、国学は前期水戸学から生まれたと考えていいだろう。

国学の基本は、『古事記』『日本書紀』『万葉集』の三つだ。本居宣長は『うひ山ぶみ』で、『万葉集』で日本の古来の心や言葉を理解してから漢文で書かれた『古事記』『日本書紀』を読むようにと言っている。漢文を読むには大和魂をしっかり持たなければならない。「漢意」に染まらないために大和魂をしっかり持つべきだというのは、宣長の一貫した考えだ。

宣長の著作を読んでいると、「道」という言葉が何度も出てくる。宣長をはじめとする国学者たちの言う「道」とは何なのか。『うひ山ぶみ』には天照大神の道であり、天皇の道である、と書かれている。天皇という存在を中心とした日本人の心のあり方、言い換えれば日本人独特の道徳ということになるのではないか。宣長の師、賀茂真淵が『万葉考』で古代の歌について述べた「真心」も「道」を指していると考えられる。

また『うひ山ぶみ』では、「道」を「上へ施し、下へは上以上に施すもの」としている。「上」は天皇、「下」は子孫を指すと解釈すると、天皇を敬い、子孫を守り大切にするということになる。また神の道は儒教、仏教のような理屈っぽさはなく、ゆたかで大らかで優雅なものだとも述べている。「道」とは儒教や仏教のように誰かに教えられて得るものではなく、日本人の心に初めから備わっているものだということだろう。

第二章　本居宣長

宣長の思想の特徴としては、「漢意の排除」と「もののあはれ」が挙げられる。

宣長が「漢意」を排する理由は、近世の神道が漢意に染まってしまっていたからだ。江戸時代には、儒学の一派である朱子学と神道を結び付けた垂加神道が生まれた。この垂加神道を授業で習った時は、「宣長が嫌がりそうだ」と思ったものだ。日本のものであるはずの神道を外国のものである朱子学と融合させるなんて、宣長にとってとんでもないことであっただろうことは想像に難くない。他にも様々な要因はあっただろうが、私はこの垂加神道が宣長に「漢意」の排除を主張させた大きな要因ではないかと考えている。宣長の儒教批判に関して、中澤伸弘氏の『やさしく読む国学』九十二頁に宣長が書いた儒教批判の短編小説について記されている。この話は『水草の上の物語』といい、神代の御書（古事記）のことを批判する蛙が出てくるものだ。『古事記』の神代の記述はありえないものだという狭い考えの儒者を井の中の蛙に例えている。このように、宣長は儒学をはじめとする漢意を徹底的に否定し、漢意を取り除いて初めて祖国の古の道を知ることができると説いたのだ。

「もののあはれ」は、宣長を論ずる上で最もよく出てくる言葉だ。本居宣長記念館のホームページによると、宣長は揺れ動く人の心を「物の哀れを知る」といい、歌や物語は「もののあはれ」を知ることからでてくると論じた。つまり「もののあはれ」とは、「情け」とでもいうような、日本人独特のしみじみとした感情のことだろう。そしてそのように揺れ動く人の心が、歌や物語を生むのだ。宣長は特に『源氏物語』について、著書『源氏物語玉の小櫛』で「もののあはれ」を強く主張している。『やさしく読む国学』五十四頁によると、当時『源氏物語』は淫乱な物語だと世間からの評価は低く、儒教的観点から勧善懲悪、好色の戒めの話なのだとされていた。宣長はこの説を否定して『源氏物語』は「もののあはれ」の物語なのだと述べ、後世における『源氏物語』の評価を上げることに成功したのだ。

前述の『古事記』『日本書紀』『万葉集』のなかで、宣長が特に重視したのは『古事記』だ。初の『古事記』の注釈本『古事記伝』は宣長の代表作である。宣長が『古事記』を重んじたのは、『古事記』が古の言い伝えをそのまま今に伝える、いわば道を知る第一の古典であったからだ。『日本書紀』は『古事記』と違って万葉仮名でなく漢語である上、外国向けに書かれたため、古代のことがそのまま書かれているとはいえない。だから宣長は、古事記を通して古代人の考えを研究したのだ。宣長にとって古道を明らかにすることが国学を学ぶ一番の目的であることが分かる。

また、『古事記』はそれまで正史ではないという理由で重要視されず、正史として長い間皇室に並べられた『日本書紀』とは対照的に放置されてきた。だから宣長が手に取った時も万葉仮名のままだったのである。時代と共に移ろっていく言葉の流れに取り残された

『古事記』は、宣長の膨大な時間と手間を要する翻訳作業によってようやく日の目を見ることになった。『古事記』と前述の『源氏物語』は、宣長によって世間に認められた書物なのである。宣長の功績は大きい。

宣長の尊王思想についてだが、これに関しては吉田悦之先生が「大政委任論」という宣長の考えを教えてくださった。

「大政委任論とは、日本を統治すべきなのは天皇であり、将軍は天皇から委任されるという形で統治している。将軍に統治する力がなくなったら統治の資格は天皇に返すべきだ」という考え方だ。『やさしく読む国学』百十四頁下段二行目～十一行目では、大政委任論について、さらに詳しく書かれている。「宣長が尊王思想を掲げるのは、天皇が天照大神の子孫であるからで、家康は天照の計らいで幕府を開けた。つまり、天照の子孫である朝廷のおかげで将軍になれた。当時の政治体制を維持すべきだ」という思想だと記されている。

要するに、宣長は江戸幕府が統治する世を天照がそうさせた、幕府は朝廷の代わりに統治を行っていると考えており、幕藩体制の世を「道」から外れているとは考えなかったのだ。この大政委任の考え方は、後期水戸学の学者たちにも共感され、後期水戸学の尊王攘夷論に繋がっていく。

第三章　水戸学

ここからは、水戸学に話題を移そう。

水戸学は、水戸藩が徳川光圀を中心に『大日本史』を編纂する過程で興った学問だ。前期水戸学と後期水戸学に分かれる。前期水戸学は十八世紀初め、光圀の時代。『大日本史』の編纂を中心に、様々な古典研究を行っていた。契沖が『万葉代匠記』を著したのもこの時代で、宣長も前期水戸学の影響を受けている。後期水戸学は十八世紀末から幕末にかけての徳川斉昭の時代。『大日本史』編纂の継続と、外国の接近や幕府の動揺など、当時の時局問題の解決が主な目的だ。荻生徂徠の儒学や、本居宣長の国学の影響を受ける。尊王攘夷運動の先駆けになった学問である。今回深く掘り下げ、宣長と比較するのは後期水戸学のほうだ。

まず、宣長と同じく後期水戸学に影響を与えた国学者に、吉田令世という人がいる。彼は

「国学の本質は『我国の道とある道』を考え明らかにすることだ」

と説いた。この主張は宣長の考えに非常に近い。このことから、後期水戸学も宣長や令世と同じく「道」を明らかにすることを重視したであろうと考えられる。「道」を明らかにすることを始まりとして、尊王論を形成していったのだろう。

そんな尊王論に理論的根拠を与えたのが、藤田幽谷の『正名論』だ。彼は本書で

「君臣上下の名文を厳格に維持することが社会の秩序を安定させる要である」

と論じた。つまり彼は、身分秩序の重要性を説いたのだろう。そして天皇を身分秩序の頂点に君臨する者として、尊ぶべきだと主張しているのではないか。

さらに、藤田幽谷の論を受けて、彼の門人の会沢正志斎は『新論』を著した。これは日本の政治の在り方を論じた書だ。民心の糾合、つまり国民の団結のために、尊王攘夷がいかに重要かを説いている。この本は異国船打払令が出されたころに出版されたもので、従

来の尊王思想とこの時代ならではの攘夷論が融合し、尊王攘夷思想が形成された。それにしても、異国船打払令に難色を示した蘭学者たちが弾圧される中、国学者が全く逆の主張をしていたというのは面白い話である。学問が違えば時代の見方も大きく違ってくるということだろう。

こうして後期水戸学の中で形成された尊王攘夷思想が、全国に広まることになる事件が幕末に起こる。天狗党の乱だ。

インターネットサイト「維新の志士たち幕末維新大辞典」によると、一八六四年、水戸藩尊攘派のなかで過激派の藤田小四郎、竹内百太郎が「天狗党」と称し、郷学の人々と糾合して挙兵、反尊攘勢力の市川三左衛門、朝比奈弥太郎らの「諸政党」が天狗党討伐を決定し、常陸国内で天狗党と諸政党の戦いが繰り返された戦いだ。天狗党が挙兵した理由は、尊攘への想いを社会に知らしめるため。挙兵という形で国内を乱したこの失敗から、計画性を持ち、規律正しい統制の取れた組織で討幕や改革を進めるべきだと後の尊攘派に示した。そういう意味で、天狗党は討幕と尊王攘夷運動に大きな貢献をもたらしたといえる。これは水戸学の、ひいては国学の思想が、初めて実行された事件であるともいえよう。この乱をきっかけに、水戸学で生まれた尊王攘夷恵想は、多くの人々に討幕を叫ばせることになった。

第四章　両者の比較

ここまで国学と水戸学について、尊王思想のことやそれ以外のことを挙げてきたが、結局両者の違いはどこにあるのだろう。

私は、国学と水戸学は興りだけ同じで、学者である宣長の国学と武士の学問である水戸学は全く違う道を歩んできたのだと予想していたが、その実、両者には深い関係があった。両者の関係は次のように表せる。

前期水戸学
↓影響
本居宣長
↓影響
後期水戸学

つまり、国学と水戸学は互いに影響を与えながら発展していった学間なのである。両者の思想は大体同じだったのだ。

両者とも尊王の気持ちは持っており、思想の違いは殆どない。両者の違いはどこにあるのかと考えたとき、時代の違いが挙げられると思う。

宣長の生きた時代は江戸時代の半ばという、日本史上一番安定していたと思われる時代。宣長は幕府が安定しきった十八世紀半ばに生まれ、諸外国の干渉が目立ち始める十九世紀初頭には亡くなっているのだ。そういった太平の世が、宣長に現状維持を唱えさせたのではないだろうか。

対して、後期水戸学の時代である十八世紀末→幕末→明治の流れを水戸学に照らし合わせると次のようになる。

天皇の伝統的権威を背景に、幕府中心の国家体制の強化

↓

幕府に力が無くなり、尊王攘夷運動は反幕府を唱えるようになる

↓

明治政府の指導者たちに受け継がれ、天皇国家での教育政策などに受け継がれる

後期水戸学は、創始した頃には幕府の安定期だったものの、次第に開国の波にのまれていった。外国に対して弱腰な幕府を見て「幕府では国を、天皇を守れない」と思い、討幕や攘夷運動を決行したと考えられる。

また、宣長は『うひ山ぶみ』で

「ただ道を尋ねて明らしめるをこそつとめとすべけれ。私に道を行ふべきものにはあらず」

と述べ、

「古の法も、その時代に合っていなければ自己満足に過ぎず、その時代の掟に従うことが古の道である。古の道とは学び研究するものであって、実践するものではない」

と主張した。また同じく『うひ山ぶみ』で

「たとい五百年千年の後にもあれ、時至りて、上にこれを用い行い給いて、天下にしきほどこし給わん世をまつべし」

と記し、

「五百年後、千年後に為政者が天下に敷くのを待つべきである」

と主張している。この点に関する宣長の考えは、吉田悦之先生の『日本人のこころの言葉本居宣長』百三十九頁によると、

「国学とはあくまで書物に書き記して後世に残すものであって、今を改革しようとしてはならない」

というものらしい。五百年千年という長い目で世の中を見ることができるのは、古典を読むことで鍛えられた未来を信じる心なのだそうだ。古典を学び、歴史を学んだ宣長は、どんな激動の時代を経ても必ず太平の世に落ち着く力がこの国にあることを、信じていたのかもしれない。

水戸学者がこのような宣長の考えから離れ、尊王攘夷思想を実行に移す姿勢をとり始めた契機は、やはり天狗党の乱だろう。天狗党の乱の首謀者二人は共に武士の階級であり、だからこそ尊王攘夷を掲げて武装蜂起したのだろう。武士は長い目で世の中を見る力など持ち合わせていない。自分の力で時代を切り開くのが彼ら武士だからだ。また先ほどの図を見ると、明治期には教育制度に後期水戸学の思想が取り入れられるなど、すっかり実用的な学問へと変化している。

おわりに

結論として、性質のよく似た本居宣長の国学と後期水戸学が、「道」を実行に移すか否かという点で別々の道を歩んだ原因は、幕府安定期と幕末という時代の違いと、学者と武士という立場の違いだったということになる。学者という姿勢を貫いて今の世を変えてはならないと唱えた宣長と、武士道に従って不安定な世の中をどうにかしようと尊王攘夷を掲げた水戸藩士。両者の違いはそこにあった。

参考文献

書籍

・『本居宣長「うひ山ぶみ」』白石良夫（全訳注）、講談社学術文庫、2009年
・『やさしく読む国学』中澤伸弘、戎光祥出版、2006年
・『日本人のこころの言葉　本居宣長』吉田悦之、創元社、2015年
・『週刊マンガ日本史27　本居宣長　国学の大成者』朝日新聞出版、2010年

インターネット

・「水戸学について」geocities.co.jp
・「維新の志士たち幕末維新大辞典」jpco.sakura.ne.jp
・「本居宣長記念館」norinagakinenkan.com

川崎大師を久しぶりに訪れて

逗子開成高等学校2年　堀江（ほりえ）　健介（けんすけ）

私の住む町、川崎。「川崎」というと、何が連想されるでしょうか。岡本太郎の生まれ故郷であるとか、不二子・Ｆ・不二雄ミュージアムがあるとか、ハロウィーンのパレードが有名であるとか、最近ではニュースで報道されたあまりよくないイメージを思い浮かべる人もいるでしょう。

しかし、すぐに連想されるのは、「工業地帯」と「川崎大師」だと思います。川崎の風土を考えるとき、この２つは大きな要素になっていると思います。

私が幼い頃、親に連れられて何度も遊びに行った川崎大師。慣れ親しんだ場所であるにもかかわらず、実はあまりよく知らないことに気が付いた私は、今回、川崎大師について改めて色々と調べてみたいという思いが湧いてきました。

川崎大師は、正月の初詣では毎年元旦からの３日間で、300万人以上が訪れる、明治神宮や、成田山新勝寺と並ぶ霊場です。正式名称を「真言宗智山派大本山金剛山金乗院平間寺」といい、総本山は京都の智積院になります。弘法大師（空海）を本尊とする厄除けで有名なお寺で、関東厄除け三大師の一つです。

参道の仲見世通りには、両側に商店や食事処が並んでいます。だるまの専門店や久寿餅、厄除けまんじゅう、包丁でトントンとリズミカルに飴を切るとんとこ飴などの土産物は、観光客に人気があります。

「とんとこ飴」は、飴を何度も練って空気を混ぜ、白い「さらし飴」にし、温かいうちに棒状に伸ばして大きな包丁で一口大に切ります。飴を切る際に、包丁がまな板に当たり、とんとんと音を立てるところからこの名前がついたそうです。実演販売では、職人さんが音を立てながら素早く飴を切っていく様子を見ることができ、とても面白いです。この飴を切ることは、「厄を切る」ことにつながるそうです。また、だるま専門店の店先にずらりと並んでいるだるまも、厄除け開運の人形です。このように、厄除けのご利益のある川崎大師の周辺には、厄除けの商品が多く売られているのです。

私は、小学校低学年の頃まで、親や兄姉と一緒に川崎大師をよく訪れていました。川崎大師の周辺には、たくさんの遊具のある芝生のきれいな公園や市民プール、池に錦鯉が泳ぐ中国式の庭園があり、一日いても飽きることのない場所でした。公園やプールで遊んだ後、夕方の人が少なくなった境内で鳩に餌をあげたり、お茶屋さんでお団子を食べたり、シャッターが閉まり始めた仲見世通りを抜けて帰るのは、とても楽しい時間でした。

川崎大師の参道のお店の中でも、我が家の一番のお気に入りだったのが、「みかど」という揚げ饅頭のお店です。揚げ饅頭はそうでもないけれど、酒饅頭は本当に美味しく、母が大師のほうに出かけた際は、よく家に買って帰ってきてくれました。聞いたところによると、この酒饅頭は、母のおばあちゃん、つまり私の曾祖母が好きでいつも買ってきていて、我が家の思い出の味だそうです。私が３歳の時、祖父が他界したのですが、亡くなる少し前に祖父が、「みかどの酒饅頭が食べたい」と言い、母は兄を連れて酒饅頭を買いに行ったそうです。この酒饅頭は、私にとっても思い出の詰まった懐かしい味になるのかもしれ

ません。

ところで、関東近県だけでなく、全国から参詣者が集まる川崎大師ですが、意外なことにその開山の時期や寺史の変遷などについてはよくわかっていないそうです。

古くから伝わる縁起について、『川崎の民話と伝説』(注1)に、次のように書かれています。

「大治２（1127）年という。源義家の家臣平間兼乗（ひらまかねのり）は、無実の罪で尾張の国を追われ諸国を流浪していたが、いつしか川崎の海辺にすみついて、漁をしてくらしていた。兼乗は四十二歳の厄年を迎えて日夜欠かさず厄除祈願をしていた。すると、ある夜ひとりの僧が夢枕に立って告げた。（中略）夢から覚めた兼乗が沖へ出ると、闇の中にふしぎな光を出しているところがあった。そこに網をうつと一体の像がかかった。それは兼乗が信仰していた空海の像だった。兼乗が草庵をつくって像の安置をせねばというとき、諸国行脚にきた高野山の尊賢上人が立ち寄った。兼乗は夢にたった僧のお告げを話し、像を見せた。上人は、これは空海僧正だと、兼乗と協力して大治３（1128）年に一寺をつくった。寺の名は兼乗の姓からとって平間寺（へいげんじ）とした。これが川崎大師のおこりといい、兼乗は罪もはれて尾張へ帰ったという。この伝説から厄除大師とされ、村は大師河原村、大師の像が沈んでいたところは、埋め立て地となったが、夜光町と名付けられた。」

この話のような、漁師の網に尊像がかかるという伝承は、「海上漂着神」という、庶民の信仰に広くみられるパターンらしいです。日本の国土は大小さまざまな山や島の集まりなので、古くから「寄り神（寄り来る神）」の信仰が行われており、これには海からくる神と山からおりてくる神との２つのパターンがあるようです。全国各地の海辺の社寺には、同じような海からくる神の縁起が残っているところが多く、近いところだと、鎌倉の長谷寺や浅草の浅草寺があります。特に浅草寺については、「隅田川のあたりで漁師をしていた父子が、ある夜海上にあらわれた光に導かれて舟を出すと、観音像を曳きあげた」という話で、川崎大師の縁起ととてもよく似ています。

また、調べるうちに、東日本で最初の電車は、川崎大師への参詣客を乗せる大師電気鉄道であるという話を見つけました。『かわさき民衆の歩み』（注２）によれば、この大師電気鉄道は、明治32（1899）年に開業し、「今の京浜急行大師線の前身であり、六郷橋のたもとから川崎大師の門前まで走り、多摩川沿いの線路わきには大勢の見物人が繰り出した」そうです。首都の東京でさえまだ電車が走っていない時代に、「エレキで走る車」は大変珍しがられたとのことで、「当時は、六郷橋から大師間を10分ほどで運行し、乗車賃は上等が10銭、並等が５銭だった。10銭といえば、当時米が１キロほど買えた値段であったから、タクシー並の運賃だった。」とも書かれています。

もともと川崎は、明治の初めのころまでは、東海道の宿場町として栄えていた町です。しかし、明治５（1872）年に新橋～横浜間に鉄道が開通すると、宿場町としての役割を終えて急にさびれてしまいました。それが、明治半ばごろからお大師様への参詣客で再びにぎわう様になったそうです。今の川崎駅は、当時は「川崎停車場」とか「川崎ステンション」などと呼ばれ、大きな茶屋が軒を連ね、川崎大師へ客を運ぶ人力車は160台以上もあったそうです。この参詣客を運ぶために明治32（1899）年に開業した大師電鉄でしたが、「だるま組」という人力車夫団や、川崎駅前の土産物店の猛反対にあって駅が作れず、川崎駅から１キロメートルも離れた六郷橋のたもとからのスタートになりました。しかし、３年

後の明治35（1902）年には京急川崎駅を無事に作ることができ、これがやがて品川や神奈川方面に路線を拡張し、現在の京浜急行線へと発展していったのです。私が毎日通学で利用している京浜急行線の赤い電車、そのもとが川崎大師の参詣客を運ぶ大師電鉄の電車だということを知り、とても感慨深くなりました。

今回、この作文を書くことをきっかけに、幼い頃によく家族で訪れた川崎大師に、久しぶりに行ってみようという気になりました。昔はいつも川崎駅前からバスに乗って、境内裏手の公園から入っていたのですが、今回は本で色々調べたとこともあり、京浜急行大師線に乗ってみました。

私がいつも通学に使っている京浜急行本線と、電車の色は同じ赤ですが、大師線はずいぶんのんびりとした雰囲気です。川崎大師駅で下車すると、左手目の前すぐに表参道の厄除け門があり、門前町だなという感じです。

参道をまっすぐ進んでいくと、ところどころに新しいお店ができてはいたけれど、私が幼い頃と雰囲気はあまり変わっていませんでした。あのお饅頭屋さんの「みかど」は、いつの間にか建て替えられていて、３階建てのきれいなビルになっていましたが、お饅頭の味に変わりはありませんでした。仲見世通りは全く変わっておらず、昔のままでした。

仲見世通りが終わり、川崎大師に到着。山門をくぐり境内に入ると、お線香のにおいがしてきて、厳粛な気分になりました。人の少ない境内の正面にある大本堂は立派で大きく堂々としていて、改めて歴史のある大きなお寺なのだなと感じました。

本堂にお参りをして、献香所の煙を頭にかけてから、境内をぐるりと歩くと、不動堂や八角五重塔など、たくさんの伽藍がありました。『東海道名所図会』にある江戸時代中期の川崎大師と比べてみると、ずいぶん境内が賑やかになったと思いました。

川崎大師について、私はもうひとつ気になっていることがあります。我が家の仏壇の引き出しにしまってある「赤札」というものです。

これについても調べてみると、古来より川崎大師の御開帳期間中に限って授与される赤い札で、弘法大師の直筆と伝わる「南無阿弥陀佛」の文字を版にして、貫首さま（川崎大師で一番偉いお坊さん）が祈願をこめて一枚ずつ手刷にされる尊いお守りだということがわかりました。祖母の話によれば、この赤札をいただくと、無量の功徳を授かり罪が消えるだけでなく、危篤の病人でもあらたかな霊験の不思議が現れて息を吹きかえすのだそうです。この赤札をもらえるのは、10年に一度の大開帳奉修のときだけなので、大事に持っているといいと言われました。

大開帳奉修とは川崎大師で江戸時代から続く祭事で、御本尊様が特別に開帳され、１か月にわたり多くの法要が行われるそうです。前回は平成26（2014）年５月だったそうなので、次のチャンスは10年後の2024年です。ちなみに、我が家にある赤札は平成16（2004）年５月に母がいただいてきたものでした。

幼い頃は、亀の池を眺めたり、境内や広い芝生を走り回ったり、私にとって川崎大師は遊び場でした。しかし、こうしていろいろ調べてみると、川崎大師が川崎という町の成り立ちに大きく関係していて、人々の厚い信仰を長い間集め続けている霊場なのだということがよくわかりました。これからは、川崎大師を訪れるときには、この長い歴史に思いをはせながら、敬虔な気持ちでお参りをしたいと思いました。

≪参考文献≫

（注１）『川崎の民話と伝説』萩坂昇著、多摩川新聞社発行、1993年
（注２）『かわさき民衆の歩み』川崎地域史研究会著、多摩川新聞社発行、1995年
・『やさしい川崎の歴史』小塚光治編、川崎歴史研究会発行、1970年
・『江戸時代～川崎大師興隆史話』古江亮二著、川崎大師遍照叢書刊行会発行、1996年
・『川崎大師平間寺近代史』大本山川崎大師平間寺発行、1999年
・川崎大師ホームページ（kawasakidaishi.com）
・MATCHA JAPAN TRAVEL MAGAZINE（http://mcha.jp/71480）

視点を変えた「謎の４世紀」
－朝鮮側の資料から日本の「謎の４世紀」を探る－

茨城県立竜ヶ崎第一高等学校２年　増子（ますこ）　哲央（てつお）

１　はじめに

私は、小学生の頃から、朝鮮の歴史を調べることを趣味としていた。理由は、韓国ドラマ「朱蒙」を観たからというなんともありがちなものであるが、『三国史記』などの正史に触れるうちに、本当の歴史のほうが面白いと思うようになった。

朝鮮３国のなかでも、私は特に高句麗が好きであったので、高校２年時の文理選択では、文系の世界史クラスに進んだ。高句麗は、中国や北方の騎馬民族と多く関係を持っていたからである。

しかし、５世紀前半、高句麗が倭軍（当時の日本軍）と戦ったという記述が「広開土王の碑」にあるので、高句麗は、日本とも強い関係をもっていたのは間違いない。

当時の高句麗は、中国王朝などとの戦いを通して戦闘によく慣れており、遼東、楽浪などを保有する強国であったので、その高句麗と対等に戦ったのならば、日本も相当の軍事力を持っていて、国内がよくまとまっていたと言って良いだろう。そもそも、海を越えての朝鮮への出兵自体、国内が安定していなければ成し得ないことであるからだ。

残念なことに、当時の日本は「謎の４世紀」と呼ばれる時代であった。これは、邪馬台国の卑弥呼、台与から後、倭の五王の時代まで、中国に一切使者が送られていない時代のことである。当時の日本の書物は残っていない（または作られていない）ので、中国の書物に日本の事が記されていなければ、日本の様子は分からないのである。しかし、卑弥呼の時代（３世紀中頃）の日本が混乱期にあって、５世紀には朝鮮に対する出兵を行っているので、「謎の４世紀」こそ、まさに日本の様子が大きく変化した時代とみて間違いないだろう。

そこで、私は本稿で、「謎の４世紀」の時代の日本と朝鮮との関係、また、日本国内がいつまとまり、安定したかを、主に朝鮮資料からの観点で調べることにした。

朝鮮の高麗時代に書かれた『三国史記』、『三国遺事』、日本の奈良時代に書かれた『日本書紀』、『古事記』には、当時の日本の出来事が記されているが、これらの資料は、「謎の４世紀」から数百年経った後に編纂されたものなので、編纂された当時の国内に対して、内容が有利に捏造されてしまっている可能性がある。

よって、これらの歴史書を比較、融合して見ることで、より第三者の目に近付き、本当の歴史を知ることができ、より「謎の４世紀」を知ることができるのではないかと思う。

２　それぞれの歴史書の概要

（１）『三国史記』

高麗時代に、金富敷によって書かれたもの。1145年に完成。「高句麗本紀」、「百済本紀」、「新羅本紀」、「地理志」、「人物列伝」の全50巻から成る。「高句麗本紀」に関しては、中国の書物からの引用が多い。「百済本紀」に関しては、文字博士の高興が百済に来た時代（近肖古王の時代）以前の記述は信用し難いと言われる。

「新羅本紀」においては、高麗国内に情報が豊富であった（新羅のみが平和裏に消滅したからであろうか）こともあって、情報量が多く、新羅寄りの記述が多い。それを前提にして見た方がいいだろう。

（2）『三国遺事』

高麗時代に、僧の一然によって書かれたもの。13世紀末に完成。全５巻から成る『三国史記』が紀伝体なのに対し、こちらは物語の形式になっていて、『三国史記』には載せられなかった伝承や神話を載せている。

（3）『日本書紀』

奈良時代に、舎人親王らによって編纂された。720年に完成（異説あり）。全30巻から成り、それぞれの年にあった出来事を編年体で記している。「百済記」、「百済新撰」、「百済本紀」という、現存しない百済の資料からの引用が時々見られるが、日本を神格化しようとするような文章が多く、全てを信じることは出来ない。

また、古墳時代以前の天皇の寿命が百歳を超えることがあり、正確な年数が不明なこともある。このまま見れば、当然他の歴史書と年数が合わないため、妥当な年とするために、本当の年数を計算することが必要である。

（4）『古事記』

『日本書紀』と同じく、奈良時代に、太安万侶によって書かれた歴史書。全３巻から成る。原本は現存しないが、幾つかの写本が伝わる。 712年に完成。古くからの伝承や、神話などが書かれているが、これまた『日本書紀』と同じく、天皇の寿命がかなり長いなど、不明確な点が多い。しかし、『日本書紀』と年代が合わないことなど、記述に若干のずれがある。朝鮮に関しては、大事以外記されていないので、本稿では、『日本書紀』の比較として扱うこととする。

（5）「広開土王の碑文」

三国時代に、高句麗の20代王である長寿王によって、広開土王の功績を示すために作られた碑。碑文には414年に完成したとある。現在の吉林省集安市の広開土王陵の近くに位置する。漢文によって、1802字が記されている。４世紀末から５世紀初の朝鮮半島の歴史、日朝関係を知る上で貴重な一次史料である。

（6）本稿での『日本書紀』の見方

先述した通り、『日本書紀』は記述のままに年代を特定してはならない。古墳時代以前の天皇は長生きをしすぎていて、その分在位の期間も長いからである。

まず最初に、『三国史記』の記述と対応する『日本書紀』の記述を探してみる。すると、『三国史記』「百済本紀」に、次の記述がある。

（392）10月辰斯王が、狗原で田猟をしたが、10日も帰って来なかった。[1)]

11月王が、狗原の行宮で薨去した。甥の阿莘が王となった。[2)]

続いて、『日本書紀』の記述である。

応神天皇３年、百済の辰斯王が、貴国（日本）に対して礼を失ったため、紀角宿禰、羽田矢代宿禰、石川宿禰、木菟宿禰を遣わし、その礼が無いのを責めさせた。すると、百済国の人々は、王を殺して償わせた。紀角宿禰は、阿花（阿莘）を王とし、帰国した。[3)]

両書に若干のずれはあるが、阿莘が即位する場面として、対応する記述とみて良いだろう。すると、応神天皇３年が、392年であることが分かる。

さらに、この時代以前の天皇の在位年数の平均値（以下、平均在位年数とする）と、年代が信用できる奈良時代から昭和時代までの天皇平均在位年数を比べてみると、前者は約50年、後者は約15年と、３倍以上のずれがあったのである。

そこで、前者の各天皇の在位年数をそれぞれ３で割り、応神天皇３年を392年として、そこから年代を遡ることとした。すると各年代は図のように、『三国史記』「新羅本紀」（以下、「新羅本紀」とする）と国際情勢は合うようになる（確実に年代を特定することはできないが、各天皇の在位中の前半に起きたことなのか、後半で起きたことなのかで判断できる）。例えば、「新羅本紀」の300年の記述に、新羅が日本に使者を送ったことが記されている[4)]が、『日本書紀』でも対応して、新羅王子の天日槍が来日したことが記されている[5)]。また、日本が熊襲討伐などを盛んに行っている300年～340年頃は、「新羅本紀」にも日本侵攻の記述がみられないが、神功皇后が新羅を討伐したという記述の周辺は、「新羅本紀」でも日本侵攻の記述が多くなるのである。

３　『三国史記』と『日本書紀』の比較から分かる、日本が国としてまとまった時期

『三国史記』には、日本の事は「倭」としか記されておらず、王朝の交替や、日本の国際情勢が、これだけではほとんど見えてこない。だが、一つだけ注目できる場所がある。それが、「新羅本紀」の次の記述である。

（287）倭人が一礼部を襲い、村を焼き、一千人もの人々を連れて帰った。[6)]

（289）倭兵が攻めてくるとの情報で、船を修理し、兵器を修繕した。[7)]

いずれも、日本と新羅との戦争に関する記述であるが、注目すべきは、「倭人」と「倭兵」の違いである。そもそも、「兵」とは「つはもの」、つまり、統率された正規の軍を表すのである。また「倭人」の記述の時は、略奪などが主であるのに対し、「倭兵」の記述の時は、城攻めや、大がかりな戦闘が多いことから、ただの略奪集団と、統率された軍団とを、「人」と「兵」によって分けて書かれたのだと推測できるのである。

そして、この「倭人」と「倭兵」の表れる頻度が、287年以前のほとんどが「倭人」、289年以降のほとんどが「倭兵」と、はっきり変わるのである。

つまり、289年を境に、日本には、統率された軍隊を海外に送り込める政権が完成したと、『三国史記』から読み取ることができる。

では、この時期の『日本書紀』の記述を見てみるとどうなるだろうか。

平均値の計算で求めた年表によれば、289年とは、崇神天皇（第10代天皇）の時代にあたる。実は、この崇神天皇以前の記述には、あまり対外活動（日本国内の別勢力に対するものも含む）はみられないが、この天皇の代になって、四道将軍の派遣など、積極的に対外活動がおこなわれるようになったのである。また、崇神天皇は、神武天皇（初代天皇）と同じく、ハツクニシラススメラミコト（漢字の書き方は別）の名を与えられていたことから、日本

にとって大事な功績を残した可能性が大きいと思われる。

また、『日本書紀』の記述によれば、崇神天皇の代に、初めて任那から朝貢を受けたとも記されている。『日本書紀』は、中国から使者が来たときさえも朝貢と記したため、本当に任那から朝貢を受けたのかは定かではないが、少なくとも、日本の存在が南朝鮮に影響を及ぼし始めたのは、まさにこの頃からだということだろう。

対外活動を積極的に起こしはじめ、海を挟んだ任那にまで影響を及ぼしたのだから、日本国内の事情に心配が無くなった。つまり、国家のまとまりが完成したのはこの時であると見て良いのではないだろうか。

4 「謎の4世紀」における朝鮮諸国と日本との関係

この時代の朝鮮と日本の関係を見るのならば、「広開土王の碑文」に刻まれている、日本軍と高句麗軍との戦争（以下、日高戦争とする）を見ていくのが良いだろう。

以下、「広開土王の碑文」の日本関係記事の内容である。

（399）百済が倭と結んだので、平壌に進軍した。そこで、新羅人が助けを求めてきたので、歩騎5万を送った。

（400）新羅を救援した。高句麗軍が倭軍を討ち、任那、加羅まで進むと、安羅軍が隙をついて新羅の王都を破った。

（404）倭軍が帯方郡に侵入したので、これを討って大敗させた。[8)]

この戦争は、南朝鮮全域で起こった、高句麗と日本との戦争であったと見て良いだろう。だが、奇妙なことに、『三国史記』にも『日本書紀』にも、この記述が無いのである。高句麗が五万人もの軍隊を出兵させたほどの戦いならば、相当大きい規模の戦いであったはずなのに、いずれの書物にもこの記述が無い。だが、このことから、当時の朝鮮諸国と日本との関係を見ることができる。

（1）新羅

新羅と日本との関係は、日高戦争が『三国史記』に記されていない事から読み取れる。注目する点は、日高戦争で、新羅の首都である金城が陥落していることである。

『三国史記』の記述がやや新羅寄りであるというのは先述した通りであるが、これは編纂当時に新羅の資料が多かっただけでは無く、『三国史記』の編者である金富軾自身が、新羅の王室に連なる門閥貴族であったからである。当然、新羅が首都を落とされたなどと好んで書くはずがないので、何らかの細工、または捏造をしたということが考えられる。

『三国史記』「高句麗本紀」の、日高戦争辺りの年代の記述に不自然な場所がある。それが以下の記述である。

（400）正月、燕に使者を送り、朝貢した。[9)]

2月、燕が、二万の軍勢で侵入し、新城・南蘇城の二城を落とし、七百里の土地を奪い、五千余り戸を連れて帰国した。[10)]

「広開土王の碑文」で、新羅を救援した年の出来事である。どこが不自然なのかと言えば、朝貢したにも関わらず、高句麗がたった2ヶ月で燕に攻められている点と、あまりにもあっさりと首都である国内城付近の南蘇城まで攻め入られていることである。普通ならば、燕はそこまで急いで高句麗を攻めて他国の信頼を失うことはしないだろうし、高句麗

側も、反撃できる程度の軍隊は北方に駐屯させていたはずである。

本来、高句麗が中国王朝に朝貢するのは、中国王朝からの攻撃を被らないようにするためであり、高句麗が南方に目を向けていた証なのである。高句麗が反撃できなかったのも、燕が急いで高句麗に攻め入ったのも、高句麗が日高戦争のため、大軍を動かし、北方が手薄になったからだと考えることができるのである。

また、『三国史記』と広開土王の碑文の記述をつなぎ合わせてまとめてみると、百済が日本と結んだため、急ぎ平壌に進軍（「広開土王の碑文」）→北方が手薄になったため、攻撃を被らないために燕に朝貢（『三国史記』）→高句麗軍、新羅を助け日本軍を討ち南方に深く進軍（広開土王の碑文）→その隙に燕が裏切り高句麗に攻め入る（『三国史記』）。

上のように、記述の辻褄が合ってくるのである。このことから、金富軾はこの戦いを『三国史記』上から消そうとしたが、不自然な点を残してしまったと考えることができ、当時、やはり新羅は劣勢で、常に高句麗側か日本側かに助けを求めなければ存在することができなかったということをおのずと認めてしまうのである。また、『三国遺事』「奈勿王、金堤上」という逸話には、390年に新羅は日本に人質を送っており、419年には、高句麗にも人質を送ったと記されていて、『三国史記』にも人質の記述があることから、当時の新羅は日本に対して時には従い、時には高句麗に従って対立する、ということを繰り返していたようである。

（2）高句麗

高句麗と日本との関係は、『日本書紀』に日高戦争の記述がないことから見ることができる。先述した通り、『日本書紀』には日本が神格化されており、朝鮮諸国との戦いで負けたことなど一度として記されてはいない。

この『日本書紀』が、敗北した日高戦争を記す事は確かに無いのだが、関連がありそうな記述がある。それが、神功皇后の三韓討伐である。これは、神功皇后が自ら大軍を率いて海を渡り、新羅につくと、海の波が新羅の大半を覆い、新羅王が戦わずに降服し、高句麗と百済も臣従を誓ったという内容である。王族が自ら出兵するような大規模な戦いは、この三韓討伐以外に無く、高句麗と百済も関連しているため、「広開土王の碑文」に刻まれている戦いと、関係があるのは三韓討伐以外に無いのではないかと思う。新羅の首都が落とされているのも、『日本書紀』上ではこの戦いのみである。

それにしても、三韓討伐には、どこか神話的な雰囲気がある。他の新羅との戦いの記述には、しっかりと戦いの経緯が記されているのに、三韓討伐だけが、波が新羅の大半を覆った（恐らく日本軍の数が多かった事を示したかったのではないか）など、不明確だが、誇示的な表現が多い。また、古事記に記されている三韓討伐には、高句麗と百済とを従わせたことが記されていない。ただ、『日本書紀』も『古事記』も、新羅を従わせたことを、いきいきと描いているのである（そのため、神功皇后の新羅征討とも呼ばれる）。

そもそも、百済王が、『日本書紀』の三韓討伐の直後の記述で、「海を渡ったところに神聖な国（日本）があるのは知っていたが、道が険しく朝貢することができなかった」と話しており、とても討伐を受けた後の言葉とは思えない。神功皇后も、360～370年頃の人である（平均在位年数から求めた年）ことから、年代がわずかに合わない。そのうえ、神功皇后の記述には彼女が卑弥呼であったことを匂わせるような部分さえあり、なおさら年代

が合わない（卑弥呼は３世紀中頃の人）。そのため、『日本書紀』の編者が、年代をずらしたり、その辺りの表現を曖昧にすることで、わざと三韓討伐を詳しく特定出来ないようにしたのではないかと考えることが出来る。日本軍は新羅を打ち負かしたので、そこはいきいきと描くが、高句麗軍に勝つことはできなかったために、『古事記』ではそこを隠し、『日本書紀』では戦わずに降服させたとし、両書ともに年代をずらし、あまり詳しくは書かないようにしたのである。

おそらく百済に関しては、やむなく降服させたことにしたのだと考える。三韓討伐は、百済の初めての朝貢より前の記述にされたからである。

こう考えれば、日本は当時、高句麗に対して劣勢だったことが伺える。５世紀の中頃に、日本で桂甲が使われるようになったのも、高句麗との戦いが関係しているのではないだろうか。

（３）百済

百済は、広開土王の碑文では日本と結んで高句麗と戦ったことが記されているが、『三国史記』でも『日本書紀』でも、日本と結んでいたことが記されている。問題なのは、両国の立場である。

『三国史記』「百済本紀」では、397年の５月に表される記述が日本と百済における最初の接触で、百済の第17代、阿莘王の時代である。太子を人質に送ってはいるが、あくまでも両国が対等であるかのように記されている。

対して『日本書紀』であるが、最初の接触は百済の第13代、近肖古王の時代で、百済が日本にへりくだったかのように記されている。

いずれの王も、高句麗との戦いの最中の時代にいたことから、高句麗に対抗するため、日本と関係を結ぼうとしていたということが分かる。問題は、いずれの記述が正しいか、ということである。

『三国史記』「百済本紀」の他の記述を見てみると、百済は４世紀前半まで、新羅や靺鞨と小規模な戦争を繰り返していた。だが、近肖古王の時代になると、何の前触れもなく、高句麗と大規模な戦争を繰り返し行っている。当然、短期間で百済一国のみで高句麗と対等に戦えるまでに成長したというのは考えにくいことだ。百済に協力する勢力、しかも対等ではなく、「後ろ盾」としての存在が必要である。それが日本であったと、私は考える。朝鮮諸国には、それほど力を持った政権が存在しなかったし、中国王朝には時々朝貢をする程度で、大きな支援を受けていたとは考えにくいからだ。

だからといって、日本に完全に従っていたわけではないと思う。日本にとっても、少しは相手の顔を伺わなければならない関係だったのではないだろうか。中国から来る文化や技術はほとんどが百済から来るし、百済との友好関係が崩れれば日本は朝鮮半島南部への影響力を大きく失ってしまう。そう考えれば、百済と日本は、両国の利益のため、切ってはならない仲だったのではないかと考えられる。よって、日本と百済の立場は、ちょうど『三国史記』と『日本書紀』の記述の中間辺りであったのではないかと分かる。

５　まとめ

本稿では、「謎の４世紀」の日本の状況について、朝鮮側からの観点を主として研究した。

その結果、日本は３世紀後半、日本側の資料では崇神天皇と思われる時代に、国内がまとまり（中央集権化）、新羅に統制された軍隊を送り込むことができるようになった事、新羅、百済に対しては優勢で、高句麗とは対等、もしくは劣勢の位置にあり、朝鮮半島北部とそれ以南（日本列島を含む）で、二大陣営を形成していた事を示す事ができた。

近年、世界のグローバル化が進み、国際交流が増え、それに伴って、朝鮮の文化が少しずつ日本にも紹介されることとなった。朝鮮半島に住む人々とは、日本人は長く関係を持ってきており、その分、いがみあったり、敵対するといったことも少なくなかった。そのためか、今や莫大な情報を有したインターネットなどには、朝鮮に関する批判が少なくなく、歪んだ観点から日本と朝鮮のことを関連づける人々も増えてしまった。逆に、極端に朝鮮に肩入れして、歴史を語る人々も現われてしまった。

そのため、私がドラマ「朱蒙」で見た光景は本当だったのだろうかと、パソコンからインターネットを覗いて見ても、極端に偏った歴史観と、歪んだ観点から歴史を見るだけとなってしまった。どれが本当の歴史なのか、取捨選択をすることができなくなってしまったのである。

正史である『三国史記』、『三国遺事』、『日本書紀』、『古事記』、「広開土王の碑文」に触れることができたことは、私個人にも、とても意味のある事であったと思う。朝鮮史に関してはまだまだ謎が多いので、これからももっと、正史をよく読んで、間違った情報に騙されずに多くの謎について触れていきたいと思う。

注

１）『三国史記２』325ページ、４行目参照
２）『三国史記２』325ページ、５行目参照
３）『日本書紀（上）』259ページ、４～６行目参照
４）『三国史記１』57ページ、13行目参照
５）『日本書紀（上）』172ページ、９～11行目参照
６）『三国史記１』55ページ、８行目参照
７）『三国史記１』55ページ、10行目参照
８）『ウィキペディア　好太王碑』碑文7行目～20行目参照
９）『三国史記２』130ページ、１行目参照
10）『三国史記２』130ページ、２～４行目参照

参考文献

・井上秀雄訳『三国史記１』平凡社、1980年
・井上秀雄訳『三国史記２』平凡社、1983年
・金思燁訳『三国遺事全』六興出版、1980年
・山田睦訳『日本書紀上』教育社、1992年
・三浦祐之訳『古事記』ＮＨＫ出版、2014年
・安本美典『天照大御神は卑弥呼である』心交社、2009年
・皇紀・年号・歴代天皇・歴代将軍・京都通百科事典、www.京都通jp＞Chronology
・ウィキペディア「三国史記」https://ja.m.wikipedia.org/wiki/三国史記

・ウィキペディア「三国遺事」http://ja.m.wikipedia.org/wiki/三国遺事
・ウィキペディア「日本書紀」http://ja.m.wikipedia.org/wiki/日本書紀
・ウィキペディア「古事記」http://ja.m.wikipedia.org/wiki/古事記
・ウィキペディア「好太王碑」http: //ja.m.wikipedia.org/wiki/好太王碑
・鈴木英夫『古代の倭国と朝鮮諸国』青木書店、1996年

第１表　『日本書紀』 年表

	（推定）『日本書紀』からみた日本国内の出来事	『三国史記』「新羅本紀」	
260			260
		百済戦争(266)	
270			270
		百済戦争(272)	
	四道に将軍を派遣(崇神天皇)	百済戦争(278)	
280			280
		百済戦争(286) 倭人来寇(287)	
290			290
		倭兵戦争(292)	
	任那から蘇那曷叱知が来る(崇神天皇)	倭兵戦争(294)	
300	新羅から王子の天日槍が来る(垂仁天皇) 挟穂彦王が反乱を起こす(垂仁天皇)	倭国に使者を送る(300)	300
310	熊襲を平定する(景行天皇)		310
	熊襲が辺境を荒らしたので討伐(景行天皇)		
320	東夷(蝦夷？)討伐(景行天皇)		320
330	地方行政機構の整備を行う(成務天皇)		330
		百済に使者を送る(337)	
340			340
		倭国との婚姻辞退(344) 倭国国交断絶(345) 倭軍戦争(346)	
350	熊襲討伐(仲哀天皇) 三韓討伐(神功皇后)		350
360			360
		倭兵戦争(364)	
	卓淳国に使者を送る(神功皇后)	百済から使者が来る(366)	
	百済、新羅から共に使者が来る(神功皇后)	百済から使者が来る(368)	
370			370
	新羅討伐(神功皇后) 百済が七支刀を送ってくる(神功皇后)		
380			380

第２表 『三国史記』年表

	新羅	百済	高句麗
260		6佐平を置く	
	百済戦〇(266)	新羅戦●(266)	
270	百済戦？(272)	新羅戦？(272)	
	百済戦〇(278)	新羅戦？(278) 新羅戦？(同年)	
280			粛慎戦〇(280)
	百済戦〇(283)		
	百済交易(286) 倭人戦〇(287)	新羅交易(286)	
290	倭兵戦〇(292)		
	倭兵戦〇(294)		慕容廆戦〇(293) 慕容廆戦？(294)
		漢、狛人戦●(298)王敗死	
300	倭国に使者派遣(300)		
			玄菟〇(302)
		楽浪戦〇(304)	
310			

	新羅	百済	高句麗
310			遼東戦○(311)
	倭国婚姻(312)		
			楽浪戦○(313) 帯方戦○(314) 玄菟戦○(315)
			慕容氏戦△(319)
320			慕容氏戦●(320)
		内乱○(327)	
330			後趙使者派遣(330)
	百済使者派遣(337)	新羅使者来(337)	
			燕戦△(339)
340			
			燕戦●(342) 燕朝貢(343)
	倭国婚姻辞退(344) 倭国国交断絶(345) 倭軍戦○(346)		燕戦●(345)
350			
			燕朝貢(355)
360			

	新羅	百済	高句麗
360			
	倭兵戦〇(364)		
	百済使者来(366)	新羅使者送(366)	
	百済使者来(368)	新羅使者送(368)	
		高句麗戦〇(369)	百済戦●(369)
370		高句麗戦(371)　高句麗戦△(同年)	百済戦△(371)王戦死
		晋朝貢(372)	秦使者来(372)
	百済人300人来降(373)	晋朝貢(373)	
		高句麗戦〇(375)	百済戦●(375)
		高句麗戦？(376)	百済戦？(376)
		高句麗戦？(377)高句麗戦？(同年)	百済戦？(377)百済戦？(同年)
			契丹戦●(378)秦朝貢(同年)
		晋朝貢、品届かず(379)	
380			
		晋から仏教伝来(384)	
			燕戦〇(385)燕戦●(同年)
		高句麗戦？(386)	百済戦？(386)
		靺鞨戦●(387)	
		高句麗戦？(389)	百済戦？(389)
390		靺鞨戦●(391)	百済戦●(390)
	高句麗に人質送る(392)	高句麗戦●(392)	新羅人質来(392)百済戦〇(同年)
	倭国に人質送る(393)	高句麗戦●(393)	契丹戦〇(392)百済戦〇(393)
		高句麗戦●(394)	百済戦〇(394)
	靺鞨戦〇(395)		百済戦〇(395)
		高句麗出兵中止(398)	
		高句麗出兵中止(399)	
400			燕朝貢(400)燕戦●(同年)
	倭国人質送(402)	倭国使者派遣(402)	燕戦〇(402)
	百済戦？(403)	倭国使者来(403)	
			燕戦？(404)
	倭人戦〇(405)		燕戦〇(405)
		東晋朝貢(406)	燕戦〇(406)
	倭人戦〇(407)		
		倭国使者来(409)	燕使者派遣(409)
410	高句麗使者送(410)		
			晋使者送(413)
	倭軍戦〇(415)		
		東晋使者来(416)	

日本人と共存

逗子開成高等学校２年　武藤（むとう）　佳暉（よしき）

私は六月にマレーシアに行った。日本から約五二〇〇キロ離れていて、約七時間かけて行った。この異国の地で私は日本と大きく異なる部分を見つけた。それは異なる人種の人が一緒に生活していたことだ。マレーシアは多民族国家である。マレー系、中華系、インド系の人などがいる。また、それぞれで違う文化・宗教を持っていて、一つの都市にモスク・仏教系寺院、ヒンドゥー系寺院があった。しかし、それぞれが違う文化、宗教を持っていても争うことはなく、互いに尊重し合っている。私はこの光景が素晴らしいと思った。同時に国際化が進む現代において日本にもこのような光景が見られ、さらに互いに尊重し合えるかと考えた。今回このことについて歴史的な観点などから日本人が異なる人・ものと共存できるのか、互いに尊重し合えるのかどうか考えてみた。

歴史的に日本人が差別した事件

歴史的に日本人は異なる人種を差別してきた。日本人は異なる人たちを受け入れなかったのだ。そこには政治的な理由、経済的な理由が含まれているものもある。しかし、多くは偏見であったと思う。また実権を握った人たちが下流の人たちに押しつけた思想から生まれた差別だと思う。

①蝦夷・アイヌ

奈良時代・平安時代において大和朝廷は東北地方の支配をしようとしていた。しかし、東北地方の人は服属せずに抵抗し続けた。朝廷は抵抗し続ける人を「蝦夷」と呼んだ。この「蝦夷」というのは俗称で、野蛮な民族という意味である。朝廷はこの戦いに苦戦し、蝦夷の首長の阿弖流為に自然を活用した戦術でやられ征伐できなかった。そこで朝廷側はエリートの坂上田村麻呂を送りこみ、八〇一年ついに朝廷側の勝利で終止符をうった。ちなみになぜここまでして東北を征伐したかったというと朝廷は金銭面において非常に苦しい状況であったからだ。そこで聖武天皇が大仏を建立させようとして、そこで大量の金を使った。その金は外国から輸入しようとしていたが、東北で金鉱脈がみつかったため、また桓武天皇が朝廷の強さを見せつけるという理由もある。そこから大和民族における蝦夷に対する偏見が生じたのだと思う。

その後、オホーツクの方でアイヌ文化が完成した。アイヌ文化が完成した一三～一四世紀は本土と自由に貿易をしていたが、一五世紀半ばくらいから和人（アイヌから見たアイヌ以外の日本人）と対立が深まり、貿易場所も限定され、相手も松前藩だけとなった。不平等な貿易、つらい労働も仕入れなれアイヌの人はつらい思いをしたと思う。また、この時のアイヌ人を描いた絵は偏見があったと思われる描き方であったと思う。

明治時代になってもアイヌを差別していた。強制的に蝦夷地（北海道）を日本の領土にして、アイヌ文化を否定して政府は同化政策を推し進めた。このように長い歴史において蝦夷・アイヌは差別されてきた。日本における象徴的な差別だと思う。

②関東大震災における朝鮮人

そもそも日本における差別はひどい。豊臣秀吉の朝鮮出兵からはじまり、現在に至っても在日朝鮮人などに対してヘイトスピーチなどを行い悲しい思いをさせてきたと思う。その朝鮮人差別の象徴的事件は関東大震災時の朝鮮人虐殺だ。震災後の混乱の中、根拠のない噂が広がった。朝鮮人が井戸水に毒を入れたや、建物を放火しているなどと。それで朝鮮人を大量に殺してしまった。当時、朝鮮人は暴徒化していたなどと本に書かれていたりして、虐殺が真実かどうかははっきりとは分からない。しかし、このあたりから朝鮮人に対する偏見が強まっていて、現在も二ヶ国間の中はいい関係とはいえないだろう。これも歴史的な理由からはじまり、現在に残る差別の一つである。

③戦争における差別

第一次世界大戦、第二次世界大戦とこの時は世界のあちこちで戦争が勃発していた。戦争とは国際紛争の武力解決である。つまり、殺し合いで解決をしようとする国家間同士の争いである。日清戦争、日露戦争あたりまでは国家間の争いだった。しかし、二回の世界大戦は一般市民もまきこんでいる。日本では「鬼畜米英」というスローガンで思想からアメリカ、イギリスに対して反感情を持たせたり、映画やアニメで国民の戦勝気分をあおらせようとした。思想弾圧で当時の人々は冷静になれずに差別的になっていったと思う。

また、日本は多くの国を支配してきた。そして支配された国で生じた反日感情を武力で沈めようとして、多くの人が亡くなっていった。韓国や中国、そしてシンガポールに至るまで抗日運動によって日本軍に殺された人の慰霊碑が建っている。

このように戦争時に多くの人が殺されていった。しかし、殺された多くの人は罪がない人で、また殺した方も思想弾圧で罪が無い人を殺してしまったのだと思う。戦争下の日本（もちろん世界の多くの国々）は冷静な考えをすることができなかったのだ。

ではなぜ日本は他民族を受け入れることができなかったのか。

そもそも日本は多民族国家ではない。アイヌや琉球民族などもいるが、基本的には大和民族が大部分を占めている。つまり、日常的に異文化を感じることはなく、わずかにいる少数民族は力でどうにかすることができたはずだ。

また、日本は島国であり他の国から異民族がせめてくることはあまりなく、外国のように異なる人種を知ることができず、ナショナリズム的なものがなかったのだ。その考えは古くから日本人の心に根づいて、いつの日か互いに文化を尊重するという考え方ができなくなってしまったのだと思う。

もののけ姫から見える日本人の差別

「もののけ姫」とは一九九七年に公開されたスタジオジブリの宮崎駿監督による長編アニメーションであることは多くの人は知っているだろう。この作品の中ではいくらかの差別がある。それらを見ていこうと思う。

タタラ場における差別

犬神に育てられた少女（サン）の宿敵であるエボシが開拓した城にあるタタラ場。タタラ場とは製鉄所で、ここで働いている人で包帯を巻いた人がいる。その人が言ったセリフ

がある。「その人はわしらを人として扱って下さったたった一人の人じゃ。」また、エボシも「ここは誰も恐れた近寄らぬ私の秘密の庭だ。」と。この包帯を巻いた人はハンセン病の人で、隔離された場所で生活をしている。昔の日本はその病気の性質や見かけから社会的差別の対象にされていた。このように見かけから偏見することはこの時代（室町時代あたり。エボシが「明」と言うところがあったことから推測。）からあった。

自然に対する差別

日本は古くから自然と共存してきたはずである。「アニミズム」という一つ一つの山、川、海などに霊魂が宿っているという思想があった。だから自然を重んじていた。しかしエボシは人に対しては優しい心を持っていても自然に対しては持っていなかった。鉄を作るためにもののけがいることを快く思ってなく、火縄銃をはじめ大砲など多くの武器を使って殺そうとした。人間は自分の生活のことのみを考えると、周りが見えなくなる。自分の利益のためなら手段・方法を選ばない。そういうところから尊重し合う精神が失われていくのだと思う。

「もののけ姫」の作品では多くの差別や偏見などが映っていた。こういうことを映している限り現在もまだこのようなことがあるのだと思う。これからはこういうことをどう無くしていけばいいのか考えてみようと思う。

根本的な原因は何だろうか。

前にも述べたように日本は多民族国家でないということや、日本が島国であるという地理的条件もある。しかしこれらを書いてきてそれ以外にも原因があると考えた。それは思想弾圧からはじまっていたと思う。国家などの権力者が自分の利益のために相手を否定するという考えを一般市民に広げさせる。そしてそういう思想を持つことで偏見が生じてくる。また都合のいい理由をつけてあれやこれやと相手を差別する。さらに、一回ついてしまった悪い考えは強く根づいてしまって、後世にまで続いてしまう。現在でも歴史的な理由で生じた偏見や過ちが多く残っている。日本ではこういった考えを捨てきれていないと思う。だから、多民族を受け入れることが現在も他の国々と比べて難しく、異文化を尊重し合っていくことはまだ不可能であると思った。

では、これからどうしていくべきなのか。

歴史というものは過去を見て、そしてそれらを未来でどうしていったらいいのか考えていく機会を与えてくれるものであると私は思う。だから、今まで日本人が犯してきた差別や偏見、またそのせいで罪が無い人を殺してしまったという過去の過ちを事実として認めて、現在、そして未来においてどうしていくべきなのか考える必要があると思う。

私は日本人が多くの人・ものと共存していくことは可能であると思っている。なぜなら日本人には「思いやり」という言葉があるからだ。これも歴史的に見て、聖徳太子が制定した憲法十七条の中にあると思う。この内容は役人の心がまえを説いたもので、人に優しくするべきという心がまえを持てというものだ。私はこれが今後の日本人の思想に影響していると思う。前にも述べたように一度根づいた考えはなかなか消えることはなく、後世まで残るものだと思う。つまり、こういった「思いやり」の思想、相手を尊重し合うこと

ができれば日本人は共存することが可能であると思う。

世界とのつながりが多くなった今、私たちは異なる人たちや物を受け入れていく必要がある。だから、歴史を振り返って未来をより良いものにしていくにはどうしたらよいのかと考えていくことが必要である。そうしたら日本人は共存していくことができるだろう。